

名勝天然紀念物

須佐灣案内

Y



名勝天然紀念物

須佐灣案內



Y234
F8

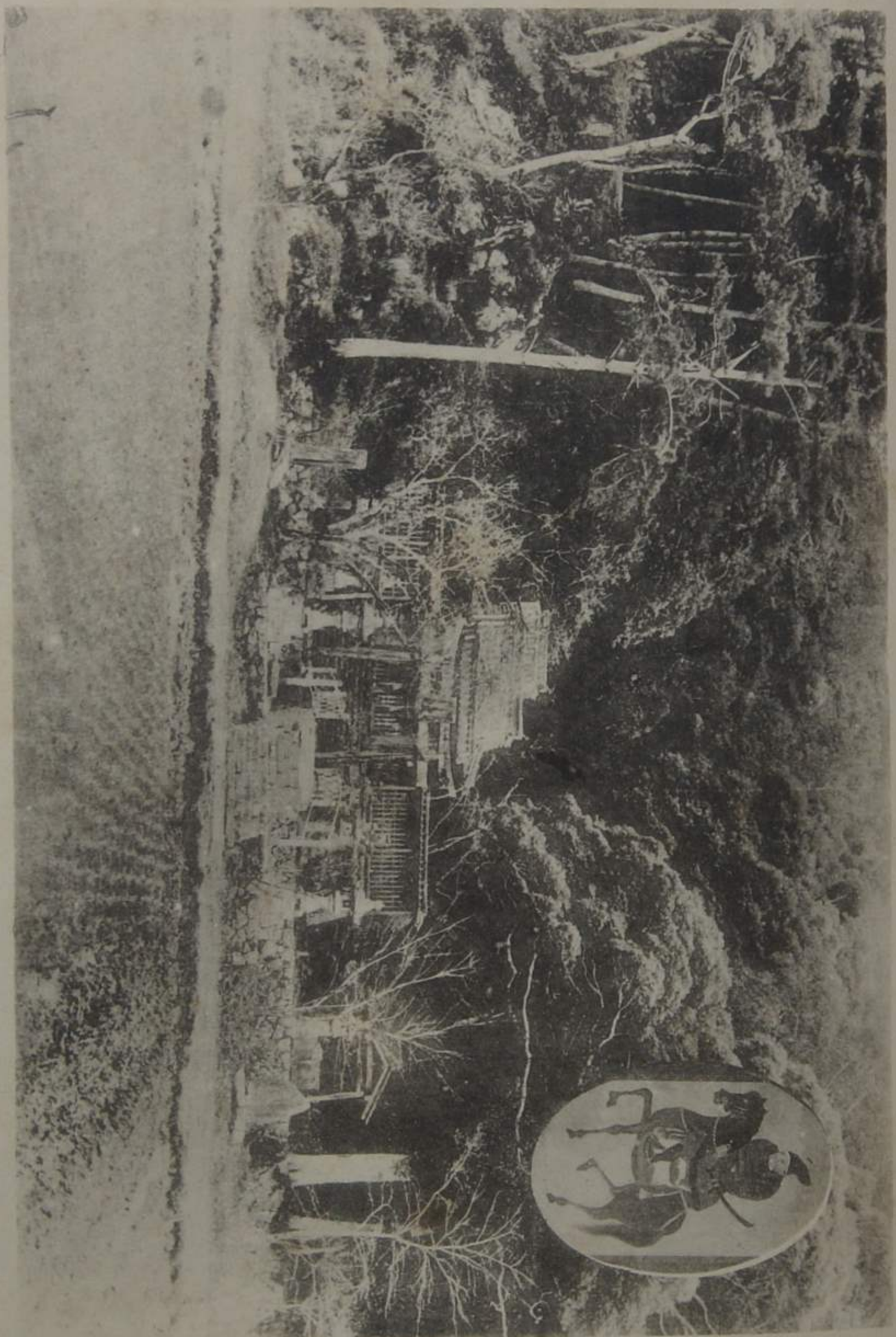
景
全
灣
佐
須



34490

萩市立図書館

三井政一
印



益 田 親 施 及 笠 松 神 社



時

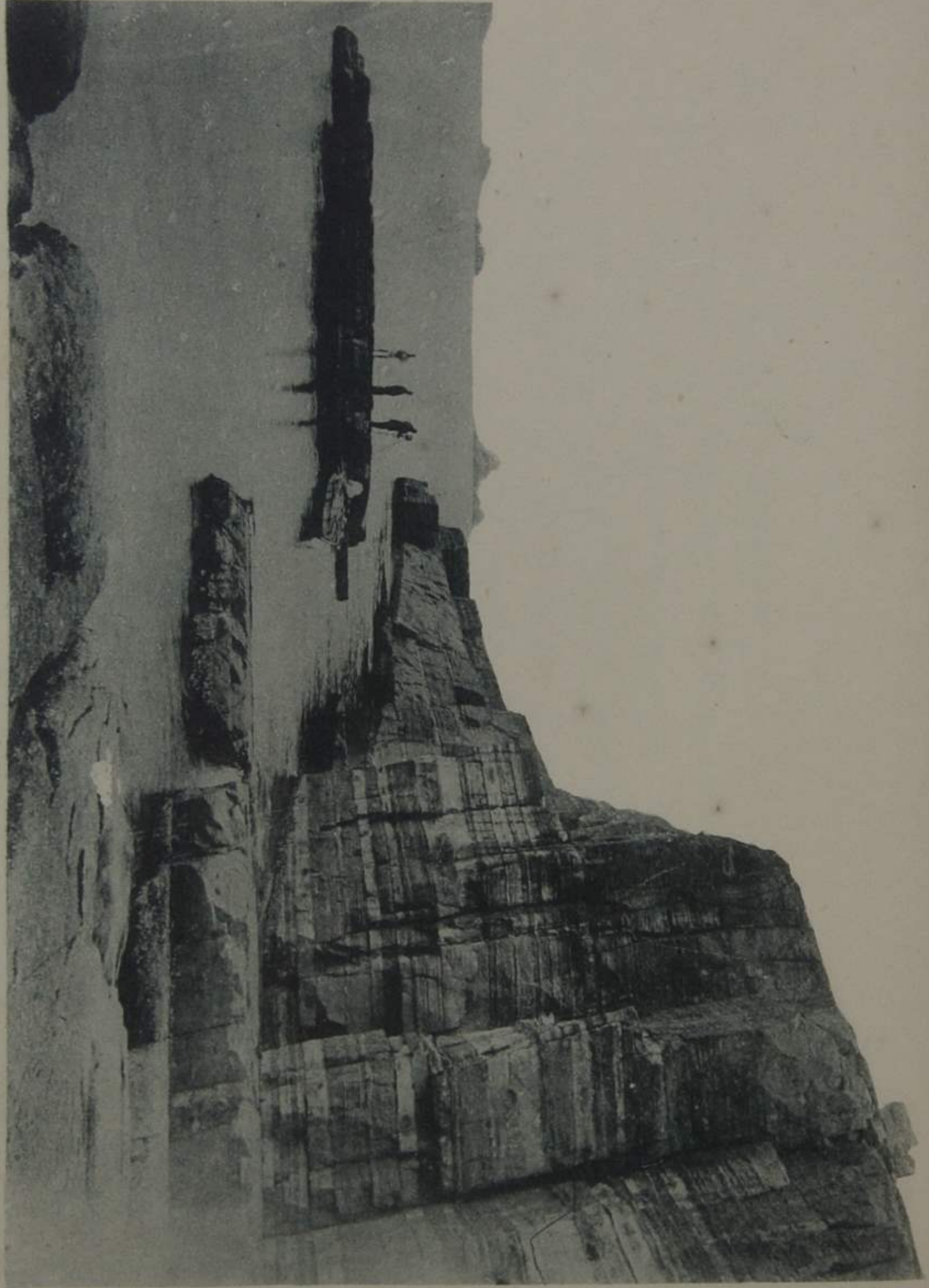
湖

金



岩 風 屏

大 六 層 一 一 層



序

諒闇の雲もはれて、日月も頗に光を増し、干支は戊辰にあたつて、新日本興隆の基を開いた明治戊辰後第一回の還暦の年、今秋は畏くも、今上陛下即位の御大典をとり行はせられるといふ昭和三年の春三月、櫻の雲も暖に、柳の眉ものびる頃、わが須佐町に鐵路開通の式を擧げられることになつたのは、重ね重ねの喜び、須佐の人士が聖代の餘澤に感激するのは勿論であるが、絶勝須佐灣の世に出ることは、近郷近縣の喜びだけでなく、等しく天下の幸とする所、殊に須佐灣には、地質學鑛物學上無比の好資料があるのだから、世界學界のためにも、頗る興味をよび起すことであらうと思はれる。

ついでには今後遊覽者各位の手びきとなり、葉となるものを作りたいといふことになり、町長津田五百名氏より御依頼があつたので、つい秃筆を走らせることになつた。實地の踏査にあつては、育英小學校長田中惣一氏同校訓導仁保義助氏の御配意を煩はし、兩氏並に須佐町役場の村岡元治氏大塚音熊氏からは種々御示教に預つた。津田町長の御高教を蒙つたことは勿論である。又育英小學校調査の郷土誌數冊、横山健堂氏の「松下村塾の別働隊」の一篇は頗る参考になつた。地質については佐藤博士の調査に基き、地質

學、岩石學等の諸書を参考し、山口高等女學校小田教諭の示教を辱うした。なほ表紙並に地圖は須佐町松野信一氏の手を勞したものである。
本書に若し探るべき所があつたとしたら、それは是等各位の御力によるもので、又もし不備の點があつたとすれば、それは全く著者の不敏の致す所である。幸に大方諸彦の御叱正を得て、他日の完成を期したいと思ふ。

昭和三年三月十日

櫻圃山房にて

著者しるす

名勝及
天然記念物

須佐灣案内

目次

一、序説……………	一
一、須佐町の沿革……………	
1、須佐町概説……………	
2、町名の起源……………	
3、益田家……………	
4、松下村塾の別働隊……………	
5、吉田松陰の須佐灣開港論……………	
二、須佐灣の紹介……………	
二、名勝としての須佐灣……………	
一、須佐灣絶景の特色……………	
1、概説……………	
2、山岳美……………	
3、海洋美……………	
4、湖沼美……………	
6、勤王志士の來遊……………	七
7、前原一誠の敗退……………	八
8、須佐村と須佐町……………	八
9、將來の須佐町……………	八

○

5、島嶼美

6、斷崖美

7、波瀾美

8、綜合美

二、探勝のしるべ

甲、海邊の勝地と古跡

1、海よりの探勝

イ、水海灣

ロ、鮑の養殖場

ハ、聖巖

ニ、堀氏別荘

ホ、笠松山

ヘ、龜島と鶴崎

ト、久原波止場

チ、平島、唐船打拂古跡

リ、鹿渡り

ヌ、中島

ル、龜の首

ヲ、金瀾崎

ワ、深煙瀉

カ、鼻面

ヨ、屏風巖

タ、沖の松島

レ、神山、黃帝社

ソ、雄島

ツ、地の松島

ネ、赤瀬の洞門

ナ、烏帽子岩

ラ、潜洞

ム、觀音岩

ウ、海苔巖

キ、龍宮瀧

ノ、鏝島

オ、千疊巖

ク、布延

ヤ、波里魔溪

マ、船穴

2、陸よりの探勝

イ、東廻り

乙、陸上の勝地と古跡

イ、益田氏舊邸と益田牛庵

ロ、村社笠松社と益田彈正

ハ、育英館址と小國融藏

ニ、晚香堂址

ホ、大谷樸助の宅址

ヘ、郷社松崎八幡宮

ト、官祭三陰山招魂社

チ、唐津の梅林

ケ、引明の瀧

フ、長磯

コ、蟹地

エ、煙瀉

テ、青浦

ア、露兵漂着の記念碑

ロ、西廻り

リ、唐津瀧

ヌ、須佐燒窯元

ル、鏡山神社

ヲ、篤行者下瀬マツの宅

ワ、大瀧寺

カ、淨蓮寺

ヨ、心光寺

タ、法隆寺

レ、紹光寺
ソ、光讚寺
ツ、犬伏城址

ネ、懸ヶ城址
ナ、笠松山の城址

丙、須佐十二景

丁、須佐年中行事

戊、須佐土産

三、天然記念物としての須佐灣

一、地殻發達の順序

- 1、地殻の成生
- 2、海陸の成生
- 3、水成岩

二、地質系統の大別

- 1、太古代
- 2、古生代

三、須佐灣附近の地質

- 1、第三紀層
- イ、礫岩

ロ、砂岩

- 3、中生代
- 4、新生代

ハ、頁岩
ニ、ホルンフェルス
ホ、化石

- 2、斑禰岩
- 3、玢岩
- 4、石英斑岩

四、地殻の構造

1、地層の褶曲及び斷層

2、塊状岩の地殻構造状態

五、地質學上特に注意すべき點

四、附近名勝

- 一、萩町
- 二、益田町
- 三、柿本神社

五、須佐の印象

四四八
四五
四四八
四九
五〇
五二
五八
五九
六〇
六〇
六二
六二
六三

須佐灣之圖



名勝及
天然記念物

須佐灣案内

(一) 序説

一、須佐町の沿革

1、須佐町概説

内務省指定名勝及び天然記念物須佐灣は、山口縣阿武郡須佐町に在る。須佐町は維新の發祥地としてその名を知られてゐる長門萩町の東北約十里に在る景勝の地で、東は田万崎村を隔て、石見國に隣りし、西は大狩の峻坂を以て宇田郷村に接し、南は犬鳴山を境に小川彌富の兩村に接し、全町山脈連亘して峯巒隨所に峙ち、平地らしい平地は殆んどないのであるが、これがやがて須佐灣の風光に一段の趣を添へることになるのは、後にも説く所である。

2、町名の起源

さてどうして地名を須佐といふかといふに、須佐風土記にのせてある千家清主（千家俊信、通稱清主、出雲大神の神主、國學者で寛政四年本居宣長の門に入る）の説による

と、太古素盞男尊が韓國に往來遊ばされた時神山（從來高山とかいてゐた）山上に御登臨あそばされ、四方を御眺望あらせられたので、その山を神山といひ、神山所在地を須佐といふやうになつたのだといふ。とにかく日本海が表日本であつた神代に於ては、須佐灣は日韓交通の一要害であり、尊は屢々こゝに御寄港あらせられたのだといふのが論據である。これに關して千家清主に左の歌がある。

須佐の里須佐てふ名こそ石の上古き神代のあと残るらし

上古のことを考證することは姑く措くとして、須佐灣が天成の良港であることは、往古も後世も變りはなく、現に吉田松陰の如きは、後に記す如く、此處を開港場にせよと高唱したのである。

3、益田家

このことを述べるには、勢ひ松陰と須佐の領主益田親施との關係を明にしなければならぬから、先づ益田家のことに筆を移すことにせう。益田家は本姓藤原氏、大織冠鎌足十七代の苗裔國兼が始祖である。始め石見國一ノ宮濱に居住してゐたが、三代兼榮の代に、頼朝に屬して石見押領使に任ぜられ、二十二郡を領し世々益田の七ツ尾城に據つた。其の後十六代の貞兼に及び、時恰も應仁の亂に方り、大内政弘に従ひ兵を京師に出し、又自ら近傍を征して、大に武威を振つた。子宗兼は戦功により石見守護代となつた。其の後安藝の毛利元就、大内氏の逆臣陶氏を討伐してその領土を併せ、更に尼子氏と

兵を交へた。時に十九代藤兼七ツ尾城により、中立を保つてゐたが、元就の和平の求めあひ、遂に之に應じた。

その子元祥材武にして、豐太閤の征韓の役に従つて功あり、其の後この地に移るに及び須佐は城下として領内七ヶ村の中心となり、漸次隆昌の運に向つたのである。（益田牛庵の項參照）

その後益田氏は世々長藩の國老として重きをなしてゐたが、近世に至り最も傑出してゐたのは、第三十三代益田彈正である。（後章益田彈正の項參照）これが松陰と意氣相投合してゐたのである。

4、松下村塾の別動隊晚香堂

吉田松陰の最大の知己であり恩人である人は、何といつても維新の大立物毛利敬親である。松陰が十一歳のとき、敬親の前に孫子を講じて以來、人物鑑識の明に富んだ敬親は常に松陰を忘れず、下田投艦の蹉跌以來八年間、蔭になり日向になつて、常に彼を庇護し激勵してゐたもので、彼が幽囚中十分に言論を發表し、同志を鼓舞し、遂に一世を動かすに至つたのは、敬親の知遇によることが多大であるが、この明君志士の間に立つて、周旋の役をつとめたものは前記の彈正である。松陰と彈正とは殆んど同年輩で、互に推重してゐたもので、兩人の相談により、彈正はその家臣の有爲な人物數人を村塾に送り、松陰は村塾の錚々たる人物十數人を須佐に出張せしめて、松下村塾の唯一の別

働隊とするに至つた。晩香堂が即ちそれである。(後章参照)

四

5、吉田松陰の須佐開港論

吉田松陰は益田彈正の人物並に潛勢力と、須佐の地形に着眼して、須佐開港の説を高唱した。即ち「今日の急務は商船軍艦を製造して、廣く海外に交通せしめ、遂には五洲を横行するに至らしめるに在る。然るに三面海に包まれたこの長州に、航海通商の大計が未だ確立せられてゐないのは、遺憾千万であるから、須らく須佐灣を開いて貿易場とすべし。」といふのだ。

松陰は實行家である。其の言ふ所は必ず自ら實行する。下田投艦の一舉は之を證明して餘がある。故にこの須佐開港論も「彈正が長州の國老として、開國の大策を實行しようとする以上は、先づこれを自己の手許から斷行すべきである。」といふ意味も含まれてはゐるが、卓識の松陰のことであるから、全然望まないことは言はぬ筈、これ一には彈正に對する信望に基き、一には須佐の天成の良港灣たる事情に基いてゐると見なければならぬ。素盞男尊以來數千載、この須佐にかゝる大使命を擔はしめたものは、吉田松陰を以て嚆矢とする。

6 勤王志士の來遊

松陰の同志で須佐に遊んだものは幾人もあるが、こゝには海防僧月性と勤王の奇僧默霖の二僧をあげるに止める。月性の神山に登つたことは、後章海洋美の項にのべる積り

であるが月性はこゝに來つて、益田家もとひ、町の寺でも説教した。説教といつても、海防の急務を絶叫したもので、筭も金具もお上に献上して、大砲を鑄る材料にせよといつた調子で、大聲怒號したもので、現に萩の方面から須佐灣沿ひに町に入る邊に、當時の臺場の趾がある所を見ると、小規模乍らも大砲を備へてゐたと見える。思ふに月性の努力も空しくはならなかつたやうである。

默霖は藝州の一向僧で、韓のため諸方の漫遊にも常に筆談を用ひた。須佐に於ては、小國融藏(後章参照)の官舎晩香堂で、融藏と筆談してゐるが、その遺筆は幸に保存されて居り、その中には「安井息軒を始めとして、天下の人が多く、佐久間象山を抑へて吉田松陰を揚げてゐるのは、どういふ譯か。」といふことなども話題に上つてゐる。又大谷樸助(後章参照)にも面會したらしく、大谷家に默霖の悲壯な詩が一幅残つてゐる。松陰は幽囚中であつたため、默霖にはあはなかつたが、その意氣に感じて、自畫像の上に一詩を題して贈つてゐる。

題自畫肖像 示默霖

上觀三千年之往古。下開三千年之來今。左踏西洋之極、右踐東海之垠。天日載首皇獻存心。憶同斯志者宇宙一默霖。

これによつて默霖の意氣を想見すべきである。

7、前原一誠の敗退

五

明治九年十一月前原一誠（長州藩士、戊辰の役に功あり、參議兵部大輔になつた。明治九年熊本の神風連と謀を通じ、兵を擧げて斬られた。）が萩に敗れ、退いて此の地に來り同志を募つたのも、晩香堂以來の因縁によつたものである。因にいふ一誠は其の股肱數人と舟にのつて海洋に浮び、東上の途を求めたが、遂に果さず雲州龍浦に於て捕縛せられた。

8、須佐村と須佐町

當地は其の後明治二十一年四月町村制の發布に伴ひ、須佐村と稱するに至り、爾來漸次發展して、大正十四年二月遂に町制を施行して現名の須佐町と改稱するに至つた。

村となり町と變つたとはいへ、今なほ昔ながらの面影を留め、懐しい舊藩町である。士族町の土塀も當時の儘である。益田氏の舊邸は衙門だけが残つて、邸内には維新の際縮少した頗る質素な建物が、纔に残つてゐるのみであるが、舊邸の繪圖は幸に育英小學校に保存せられてゐるので、當年の面目を伺ふことが出来る。邸後の笠松神社は、益田彈正を祭神とするが、これは筆を改めて述べることにする。

9、將來の須佐町

從來の須佐町は、素盞男尊の昔は別として、とにかく桃源の如き別乾坤をなし、徒に勝景を擁し、空しく奇岩怪石の寶庫を抱いてゐたが、今や昭代の餘澤に浴して、こゝに鐵路の開通を見、また之と相前後して、須佐灣は名勝及び天然記念物として、内務省の

指定を得ることになつたので、須佐は世に出るや否や、無上の光榮に浴し榮譽を負うたわけで、將來は景勝の探勝者地質礦物の研究者が、せきを切つた積水の如く、遠近から推しかけて來遊すべきは、言ふまでもないことである。なつかしい舊藩町の面影がうすれゆくのは、惜しいことでもあるが、正しく黄金時代に入つた須佐町の前途は、何といつても祝福せざるを得ないのである。

二、須佐灣の紹介

須佐町が近時有名になつたのは、須佐灣のためである。即ち須佐灣の風光が秀麗であり、その附近が地質が複雑で、地質學岩石學礦物學上貴重な研究資料を提供するからである。是等のものは固より往昔より存在するもので何も近頃になつて生起したわけでもないけれど、交通の不便のため從來あまり人に知られてゐなかつたのである。所が昭和二年四月十九日高島北海畫伯及び本縣史蹟名勝天然記念物考査委員岩根又重氏等の探勝を見るに至つた。畫伯は數日滞在して實地を踏査せられたが、その風光の佳麗壯大なことを激賞せられたので、町民ものり氣になり五月二日には須佐灣保勝會を設立するに至つた。

八月十八日には高島畫伯再び來遊せられ、三十一日まで滞在して景勝地の調査をなし、且つ同畫伯揮毫の畫會を設けて、揮毫料全部を須佐灣保勝會に寄贈せられた。

これより先き八月七日には、内務省史蹟名勝天然物考査委員佐藤傳藏博士來町、數日

滞在して須佐灣内外の景勝及び地質の踏査を試みられ、越えて十月十六日には更に高島
畫伯等と共に再び來町、數日滞在して灣内外の勝地及び神山の地質に就いて細密な踏査
をとげられた。

こんな次第で須佐灣の價値が大に認められるに至つたので十月二十一日には名勝地指
定願書の提出をなすに至り、その後内務省史蹟名勝天然記念物調査會に於て詮議せられ、
遂に昭和三年三月五日いよいよ名勝及び天然記念物として内務省から指定せられるに至
つた。

(二) 名勝としての須佐灣

一、須佐灣絶景の特色

1、概説

須佐灣絶景の特色は衆美の映發に在り、衆美の綜合に在る。高島北海畫伯は須佐灣の
風景を三種に分つて、湖水の如き小灣、小松島、大絶壁の三項をあげて居られるが、併
しこれは須佐灣風光の要素を、知的に分解したものであつて、吾々が須佐灣の絶景を味
つて、その美に陶醉する所以のものは、更にこれ等の要素美が相近接して存在し、各々
その特色を發揮しながらも、而も互に相補ひ相助けて、こゝに渾然たる全須佐灣の秀色
神韻を生じ來るがためである。即ち左顧すれば断崖削立の豪壯あり、右阿すれば小灣迂

曲の優婉あり、深山峡谷の如き島嶼の間を、縫ふが如く掉すかと思へば、忽にして渺々
たる大海に浮び出でて、水天の髣髴たるを望むといつた有様で、是等數種の風致が、互
に對照映發し、優麗なものはいよいよ優麗に、豪宕なものはずますます豪宕に、いやが上
にもその特色を發揮し、而もかたみに錯綜し、相助け相補つて、こゝに無限の魅力を生
じ來り、觀る者をして恍惚として我を忘れしめなければ止まないものである。

眼前に展開する風物は、左右相異り前後相同じからず、眼を閉ぢれば、一秒前の風景
は宛として畫の如く、面前にあるが、眼を開けば、別趣の風致はすでに媚を呈して眉に迫
り來る。靜中の動、動中の靜、自らこれ畫、自らこれ詩、この神韻氣魄こそ須佐灣絶景
の眞髓であつて、そのよく斯の如くなる所以のものは、全く峻嶺高峯直に海洋に迫り、
餘脈窮りなく分岐し、縦横に駛走猪突して海に入り、海潮亦之に應じて迂餘曲折の限り
を盡し、入江にまた入江を生じ、灣中更に灣を生じてゐるがためであつて、かの五里に
して一島嶼あり、十里にして一断崖あり、二十里にして一湖沼あり、その一を賞すると
き、自他のものは止むなく割愛しなければならぬやうな名勝とは同日の論でない。

須佐灣絶景の眞髓はこの海山交錯の美に基くものであるが、この海山交錯の美は、地
質の複雑に起因するもので、須佐灣ほど複雑な地質の露出してゐる所は珍しく、この方
面の研究をすれば、單に風致の情感のみに止まらず、知識的の趣味も豊に味はれる次第
であるが、それは後章に譲ることにして、先づ須佐灣風光の要素について一言したいと

思ふ。

2、山岳美

須佐町は山脈が直ちに海灣に迫つてゐるために、平地は極めて少く、峯巒が隨所に蟠屈して、千山万嶽波濤の如く重疊し、雲煙を帯びて深山幽谷の趣をなし、沿海の地とも思へない山姿峯容の美しさを呈してゐるが、就中須佐灣の外壁に屹然として崛起してゐる神山（従來高山とかいてゐた）は海拔は二千尺にも足りないで（一七五八尺）、非常な高山といふ譯でもないが、須佐の良港を控へて、日本海の怒濤に迫つて屹立してゐるために、古來航海者の大切な目標とせられたもので、外海側の山裾は數百尺の絶壁が連亘し、狂瀾怒濤が之に激し、山姿の豪壯雄大なことは、此の海岸稀に見る所、確に近縣沿海の一偉觀たるを失はない。

所がその須佐灣に沿うて町に面した半面は、緩い傾斜をなして裾野のやうに擴がり、蒼々たる茂樹鬱林の間には、石徑斜に通じて處々に人家も見え、秀麗な風致を備へてゐる。（神山のことについては海洋美の項並に海邊の勝地古跡の項を参照せられたい。）

3、海洋美

渺々として果しもない大海を、一眸の裡におさめるのも、亦一つの壯觀である。試に神山山頂に立つて眸を放てば、地勢が北方海中に突出してゐるため、視界が極めて廣く東は出雲の日の御崎が見え、時には伯耆の大山を雲烟模糊の裏に望むことさへも出来る。

西は相島青海島は呼べば答へるばかりで、やゝ遠く右に大津郡の川尻の岬、左に大津豊浦兩郡の境に在る天井ヶ嶽などが見える。（序に南をいへば、奥阿武の連山をへだて、スキーが出来るので知られてゐる徳佐ヶ峯がながめられる。）

北は一面の日本海で浩蕩として涯りもない碧潮は、どこで西比利亞の岸を洗ふやら、朝鮮の岩を嚙むやら、見當も附かない。唯見るものとしては、水天鬚髯としてあるかな

きかの一線が長く長く左右に引かれてゐるのみである。日の傾き雲の濃さによつて、海の色は青に綠に紺に紫に、或は明く或は濃く、或は金の如く或は銀の如く、時には烟の如く軽く、時には鉛の如く重く、千變万化の色彩は、あらゆる季節あらゆる時刻あらゆる天候に、それぞれ特異の相を呈し、而もその自然の表情は、人間のそれよりも一層の趣と味を加へてゐる。

かつて海防僧月性、萩を發して海沿ひに北進し、此の山頂に登つて北海を望み、壯快禁する能はず一詩を賦して思ひをのべたといふことであるが、げに山巔に節を立て、遙に眸を放つとき、思は潮と共にのび、氣は雲を逐うて昂り、そゞろ無限の感慨を催すのである。

因にいふ神山の岩石には磁力を帯びたものがあり、磁石が用をなさないから、方角を刻した石圓柱を建て、登山者の便に供してある。又山頂には風穴がある。穴の内部はあまり調べられてゐないが、往時試に臼を轉がして見た所、數日の後海中に轉び出た

ので、其處を白が浦といふとかの傳説がある。

長門海上觸目

廣瀬

旭莊

4、湖沼美

東風翻海大魚舞。西日無光隱鵬羽。眼看蜻蜓一片雲。須臾去作雞林雨。

「山外に山あつて山盡きず、路中に道多うして道きはまりなし」といふ語があるが「島外に島あつて島盡きず、灣中に灣多うして灣きはまりなし。」ともいひたいは須佐灣の趣である。

日本海の潮先が、右に左に跳り出た山脈の組みし易い溪合を見附けては、これでもかこれでもかと、刻りに刻つて灣入したその揚句は、精も根も盡きはてゝ、眠つたやうな優しさに、海とは名のみ、湖とも沼ともいや池とさへも思はれる優しさに變つたのが、この須佐灣である。

隨所に流れ出た山脈は、亦山としての力を失ひ、丘とも築山とも思へる感じを抱かせて、而も汀には流石に奇巖怪礁を連ね、脊には鬱鬱たる老樹を負ひ、所々に三々五々の人家を擁し、眞に愛すべき温雅の趣を備へてゐる。この縦に横に斜に蜿蜒として迂曲してゐる、蒼巒翠丘に抱かれて、東風が吹いても、西風がふいても、南風になつてもきたになつても、殆んど波を知らぬ油を流したやうな滑らかさで、數百の船舶を安らかに眠らしてゐる須佐灣は、海といはうよりも湖、湖といはうよりも池といつたがよいやうであ

るが、さてそれでゐて流石は日本海の潮つゞき、どことなく山間の湖沼や瀬戸内海などには見られぬ氣魄があり生氣がある。八頭八尾の龍神が、渚に來つて靜かに穩やかに眠つてゐるとでもいつた趣である。

5、島嶼美

灣内に奔り出た岬角は、いづれも波の如きうねりを見せ、而も縮んだりのんだりして、恰も島のやうであるが、その左右前後には隨所に本物の小島を伴ひ、巨岩を帯び、所々數十の岩群が、參差として碧潮白波の間に錯落してゐる。而も地質の複雑さは、その小島巨岩にそれぞれの異彩を放たしめ、或は赭く或は黒く、或は青く或は黄に、岩層の横に疊まれたのもあれば、石脈の斜に流れたのもあり、時には岩ひだの縦に並んだのもあるといふ有様、従つて稜角をあらはした雪舟の畫に見るやうな岩礁もあれば、ゴムまりの所々をゆびでへこませたやうな、圓やかな南宗畫風の島嶼もある。それが或は岩のみで寸縁を帯びないものもあるし、或は孤松を戴いたものもあるし、或は鬱林に蔽はれたものもあつて、これほど多い島に、一つとして似通つたものはない。油の如き海面には三々五

五、白帆の影が隠見し、空には鷗がまひ鳶が輪を描いてゐる。疑試に扁舟に棹して島間を縫うてゆけば「島かと思れば岬なり、岬かと思れば島なり、一島未だ去らざるに一島更にあらはれ、水路極るが如くにして、また忽ち聞く」とある小學讀本の瀬戸内海の文は、全くこゝの景色をかいて呉れたものではあるまいかと疑は

れる。

6、斷崖美

須佐灣の附近には、所々に外海に面した大斷崖がある。高さ數百尺屏風の如く曲折して連亘し、白浪裾を嚙み、蒼松巔を蔽ひ、豪壯にして而も雅趣があり、秀麗にして而も氣魄がある。試に葉舟を壁下に寄せて仰ぎ眺れば、舟の動搖に伴ひ、白雲の徂徠に従ひ、流石の大巖壁も見る見る傾き來つて、轟然たる響を立て、倒れかゝるかと思はれ、その心に心膽を寒からしめるであらう。

なほ巖壁の壁面は、時には板を重ね積んだやうな數百の横層を表はし、層々色彩を異にして鮮麗な横縞を見せ、時には數百の峯巒を絶大の神力を以てしめよせ、各々の峯巒を筈のやうな丈高いものと化せしめて、たばねたかとも見える縦縞を疊んで、日ざしの向によつて數十種の明暗と光澤とを見せ、或は凹凸の曲面に大は人の頭よりも大きく、小は鶏卵よりも小さい、大小無數の石礫を帯び、所々その剝落脱した空穴を持つてゐるものもあり、或は玉葱の球面の一部を切つて幾重にも包んだその皮の、やゝほぐれ氣味になつたやうなものもあるし、一々名状し切れぬほどの複雑さを有してゐる。

而もその色彩光澤は、岩膚そのものの固有の色彩の外、幾百年の苔と藻とその痕の生ずる翠綠紫緒等無限の色と、日光を浴び潮水の飛沫をおびて生ずる、眞珠の如き紅玉の如き、紫金の如き赤銅の如き、鐵の如き鉛の如き、千種万様の光を添へて、華麗とも艶

美とも見えながら、どこまでも豪宕雄壯、人に迫る鬼氣を失はない所、獨特の斷崖美である。

7、波瀾美

丘のやうな濤が魔のやうに近づいてくる。近づくまゝに濤の山がせり上つて、こ緑が翠となり、翠がさ碧になると思ふ間もなく、伸べるだけ伸び上つた濤の山のいたゞきが婆娑と崩れて、白い雪がさつと翻り、紺碧の濤の腹は見る見る跡方もなくなつてしまふ。すると白い雪は、右にも左にもすばらしい勢でひろがついていつて、幾千騎の白馬隊が、足搔をそろへて驀進するかのやうに、湧きかへり煮えかへつて迫つてくる。後からも後からも、もみにもんで攻めよせる。先鋒の勢が後につづく味方を誘ひ立てるのか、後攻の勢が先立つ勢をおひ立てるのか、前がひるめば後が猛り、右が疲れたれば左が怒りいやもうすばらしい勢。

暴れに暴れ、怒りに怒り、狂ひに狂つて、躍りかゝり、浴びせかゝる浪を、斷乎として喰ひ止める巨礁がある。巉巖がある、大絶壁がある。或は高く或は低く、或は立ち、或は臥し、或は躡り、或は脚を立て、或は肩をそびやかし、或は胸を張り、大小數千の陸の軍勢は、潮をしつかとくひとめる。

喰ひ止められてなるものかと、狂ひかゝる怒濤は、巨砲の發せられたやうな、霹靂の万嶽に轟くやうな、轟然たる大音響を立て、ありつたけの力を盡して打ちつける。か

らみかゝる、のび上つて浴せかける。飛沫は雲の如く、吹雪の如く、白烟の如く、霧の如く、流石の巨巖も暫くは影さへ見えぬ。

すると吹き捲く暴風にサツととんだしぶきのあとに、白浪をかぶつた巖の頭が現れ、肩があらはれ、腹が見え、脚が見えてくる。――先づ一面の白塊に、僅に黒き緒き幾條の縦縞が見えるかと思へば、忽ち幾百條の瀧が、白布をさらすごとく流れ落ち、その白布の幅が漸く狭くなり、はては縷々糸の如くなつて消えるかと思ふと、はや第二の狂瀾は襲ひかゝつてゐる。

陸の奥の奥までもと、打つて刳つて、はね返へされた浪は、後から躍りかゝる味方の勢と同志打をはじめ、湧き上り、たぎち下り、渦を巻き、瀬を作り、伸び、縮み、浮び、沈み、混亂の極みを盡し、活劇の限りをあらはす。岩の間に生じた泡沫は、風に吹きちぎられて、掌大の塊をなし、飄々としてまひ上る。岩燕は之をぬひ白鷗は空に啼く。

而もその姿態、その轟、その氣勢は、秒時も同じきことなく、變幻きはまりなく、壯快限りない有様。誠にこの地ならではとうなづかれる。

8、綜合美

山岳美、海洋美、湖沼美、島嶼美、斷崖美、波瀾美、それぞれ皆獨特の味ひがある。その一二を備へるのみでも名勝たる資格はあるが、須佐灣の風致はむしろこの六要素を兼ね備へ、各要素が互に助け相補ひ、こゝに渾然たる一大綜合美感を誘發し、全須佐灣

の限りなき風韻と氣魄を生ぜしめる所に、その眞髓があることは、すでにのべた通りである。(綜合美は勿論要素美ではないが、讀者の注意を新にするために、前説を反覆したのである。)

二、探勝のしるべ

寫眞をとるに方つて、殊々姿もとのへないのに、とつてしまはれたら残念ではあるまいか。ものは見所によつてよくもあしくもなる。だから正面の似合ふ人は正面を、側面の美しい人は側面を、姿のよい人は全身を、姿勢の悪い人は半身をといつた風に、少しでもよく見えるやうな位置をうつさなければならぬのである。この須佐灣を探勝者各位の眼のカメラにうつしていたゞくにしても、須佐灣としてはそれだけの注文があるのである。

その上探勝者各位としては、惜しい時間を割いての御遊覽であるから、なるだけ短い時間で、出来るだけ多くの箇所を御覽になりたいことであらうと思はれる。そこでこの二つの要件即ち

- 一、各處の勝景をなるだけ美しく見ていただくこと。
- 二、出来るだけ短時間に、出来るだけ多くの勝景を巡覽していただくこと。

甲、海邊の勝地と古跡

海邊の勝地古跡を探るには、舟を以て海よりする方がよい。併し冬季風浪の烈しいときとか、其の他の季節でも風波の著しい折とかには、舟が用ひにくいから、その際は陸から要所々々を見られるがよい。先づ海路の方から説かう。

1、海よりの探勝

先づ須佐驛で下車して、一町許の所の水海（地名）に出る。こゝで遊覧船を傭ひ入れ、巻頭の地圖に記載した路順に従つて、左記の名所を順次に見るがよい。

イ、水海灣

こゝは往古素盞男尊が出雲の日の御崎から、神山岬を目標にみ船を進めさせられ、此の灣に御碇泊の上、天候を見定めて、更に朝鮮方面に船出あそばされたので、尊にちなんで目標の山は神山、薪水御取入れの地は須佐、御船泊りの港は御津といふやうになつたといふ。その眞偽はともかくとして、かゝる傳説のあることは、數百千年の昔の人も、この灣をよい港とみとめてゐたことが伺はれて、一入のゆかしさが感ぜられる。

こゝは底が綺麗な砂地で、而も遠浅で、灣内第一の海水浴場である。

ロ、鮑の養殖場

標木が立つてゐて瀬の見える所が、鮑の養殖場で、磯見眼鏡で覗いて見ると、澤山の鮑が居る。鮑は須佐の名物で、此の灣の内外到るところに澤山産する。先年

東宮殿下が本縣行啓の際にも、縣から献上を命ぜられた。皇族貴顯の方々の御來縣の折にはよく御下命をうけるのである。

ハ、聖巖

昔歌聖柿本人麿が、石見の高津から仙崎にゆく途中、此の巖上に立つて、灣内の風光を賞した所から、聖巖と稱へたものだといふ。巖上に人麿を祀つた小祠があつたが、今は他に移された。大津郡にも人麿の遺跡といはれてゐる人丸峠がある。藩政時代にはこの上の突角をおすずみのはなといつて、領主益田家の避暑地に充てられてゐた。

ニ、堀氏別荘

堀氏は石州の富豪である。

ホ、笠松山

山麓に舊領主益田氏の廟がある。笠松の暮雪は須佐十二景（十二景は後にまとめて紹介する積りである。）の一つで、雪景色は一入のながめである。

ヘ、龜島と鶴崎

鶴が首を伸したやうな、翠松を負うたやさしい岬の前には、龜が波上に浮んでゐるやうな巨巖がある。龜島の遊魚、鶴崎の晴嵐はいづれも十二景の一である。

ト、久原波止場

對岸の地つゞきの島が赤島、その向ふの茂樹鬱林を脊に負うたのが、久原波止場であ

る。本町出身の大坂の久原氏が、壹万餘圓の巨費を投じて、本町（當時は村）發展のため築造したもので、明治四十三年五月の落成である。水が深いので五六百噸の汽船は棧橋に横附になる。

その奥に船隠といつて、船が泊つてゐても、こちらからは全く見えぬ深い入江があり、又油の磯といつて、どんな大しけの時でも、油を流したやうに、少しの波も立たぬ所がある。

航海者もこんなよい港は北海岸にはないといつてゐる。

赤島の前に磯がある。そこに養魚池を作らうと計画中である。完成の上は銀鱗金鰯の泳いだり跳ねたりする姿が自由に見られもし、又釣も出来てよい遊び場となるであらう。
子、平島、唐船打拂古跡

久原波止場の方から眺めると、赤い珠玉をいくつか列べて、ぐつとくつつけたやうな陵の頂に、松の緑が流れるやうにかぶさつて、やはらかな感じの島である。その名のやうに上は平で、櫻があり春は暖い雲を宿してゐる。

島の端に俵島といふのがある。俵を積んだやうな面白い形をしてゐる。

島の側に唐船打拂の古跡がある。時は享保十一年八月七日、神山岬のあたりに出てゐた漁船が、二度ばかりの大筒の音を怪しみ、段々調べて見ると、唐船が江崎の方へ向つて進んでゐる様子、驚いて届出ると、本藩へも注進といふさわざ。

翌くれば八日唐船は大筒を打つて入港して来る。見張の舟からは、面々扇子を以て手眞似で、沖へ出よと指圖をしたが、通じないのか應じないのか、やをら中島の西の方へ碇を入れて了つた。船長の申分によると、船は貿易の目的で、長崎に行く筈の所を、途中難風にあつて漂流したもので、船中水がなくて困つてゐるといふ話。筆談を以て吟味も重ね、本藩とも慎重相談をとげたが、怪しい所があつたものか、いよいよ打拂ひに決着。

本藩の加勢も到着したので、舟陣を整へて攻め立てたが、當時の覺書や繪畫等を見るに、唐船は長さ二十數間、水上四五間ばかり浮き出でた、四十餘人乗の大船で、之をとりまく味方の舟は十分の一位の小形の舟、まるで蟬に蟻がたかつた様だ。九日晚から大筒鐵砲を打ちついたり、燒草舟や松明火矢などを以て、火攻にしたりしたが、逃げるけはひもなく、却つて平島赤島の間に移つて來た。初の間は仲々手應がなかつたが、十一日の晝から遂に焼け出し、眞紅の炎をあげて十四日夜中まで焼けつゞけたといふこと。とにかく此の地では珍しい騷であつたらしい。

リ、鹿渡り

平島の本土と接する所に、峡谷のやうな海峡があつて、舟が通ずるが、昔はこゝを鹿が渡つて往來をしてゐたといふ。

又、中島

鹿渡りのあたりから中島をながめた景色は、灣内有數のながめで、やさしく趣のある島の上には、ふり面白い老松が生ひ茂り、滴る翠は海に流れて、潮にも倒影をあざやかに、繪も及ばぬながめである。島上に辨天社があつたが、今は須佐浦の惠美須社内に移された。だが七月十七八日の祭禮には、御舟で此の島に渡御があり、宮島の管絃祭そつくりの賑かさだ。

此の邊は島蔭で風波が穏であるから、久原波止場の出来るまでは、船の泊り場になつてゐて、中島の泊船といつて、十二景中にも數へられてゐる。前記の平島には曾て通夜堂があつて、碇泊中の舟人が、神山の海神に祈念を捧げる便に供したものであつた。赤島からこの邊はちんだいのよく釣れる所である。

ル、龜の頭

中島に向つて本土から突出してゐる岬を、龜の首といふ。神山を胴体とすると、こゝはその首であり、恰も海に俯して潮を吞まうとしてゐるやうに見受けられる。

ヲ、金瀾崎

こゝは北海畫伯の所謂小松島で、大小の巖島が四十餘りも一面に散在し、畫伯をして青海島の十六羅漢以上だと叫ばしめた處。岩質が複雑なので、島々がそれぞれ獨特の石脈光彩を呈して、千態万狀である上に、島上には古雅な蒼松が蟠屈して、とびかふ白鷗と共に趣をそへてゐる。

こゝで狂瀾怒濤の踊躍激突の壯景を味ふのは、頗る快心のことであるが、(前記波瀾美の項参照)波靜かな夕、沈みゆく夕日を眺めるのも、亦えならぬ好景である。――時々光を失ひ、刻々紅を加へ、いやが上にも大きく、春き沈む夕陽の美しい輝に、空も潮も紅に染み、島も帆も波も黄金に輝き、巖も松も舟も紫金に榮え、滿眸悉く珠玉、乾坤すべて紅焰の大景は、到底筆舌のよく盡す所でない。

春の頃白魚めばるといつて、白魚でめばるをつることは、當地方の特技でそのめばるは特に美味である。須佐灣一帯どこでもとれるが特に金瀾、松島の海苔石、雄島等は好漁場である。

ワ、深煙瀉

大きいもつものつれる所。此のあたりから斷崖絶壁となり、雄大の景色が漸次展開してくる。

カ、鼻面

突出した巖の腹に大きい穴が刳られてゐて、牛の鼻面のやうだ。秋から初冬にかけて、くろやの釣れる所である。附近に釣瓶落し鍋島の勝がある。

ヨ、屏風岩

五百尺ばかりの斷崖が削られたやうに立つて、曲折連亘してゐる有様は、恰も造化の

苔隨所に點綴し、岩裾を嚙む白浪碧潮を相映發してゐる。

一体に岩面は、潮氣をおび飛沫に濕ひ、紫金と輝き赤銅と照り、雄大の裡にも秀麗の雅致を帯びてゐる。なほ又春は岩燕がむれとんで、面白い聲でなきかはし、冬は鷺がきて雄姿を見せてゐる。(前記斷崖美参照)

夕、沖の松島

向ふに見えるのが沖の松島で、屏風岩を左にして之を遠望する趣は、灣外有數の風致である。松島の附近には、大きいたちがひが澤山とれる。

須佐灣西側の景勝は先づこのあたりを終とする。舟を廻らして雄島に向ふことにする。レ、神山、黄帝社

この邊から神山をながめるがよい。海拔千八百尺許の山であるが、日本海中に突出してゐるので、山上からは、東は出雲の日の御崎、西は大津郡の向津具岬まで展望されるほどで、航海者の大切な目標とせられてゐる。

山に黄帝社といふのがある。航海者の守護神として有名で、海路遭難の折祈念をこめると、不思議に靈驗があるといふことで、この神の加護によつて、九死に一生を得たといふ話が、いくつも残つてゐる。祭神は素盞男尊といふ説もあるが、久しく黄帝社と稱へ來つてゐるので暫く俗稱に従つておく。(前記中島の項参照)

神山には黄帝社の外に瑞林寺といふ曹洞宗の禪寺がある。瑞林の晚鐘は十二景の中で

ある。

この山にはもと東山、西山といつて、二つの大きい牧場があつて、宇治川の先陣で有名な池月はこゝの産だといふ傳説までがある。

それから此の頃は尊石(斑瀾岩のこと後章参照)と稱へて、頗る立派な石材を掘り出すやうになり、漸次他へ移出せられるやうになつた。(前記山嶽美の項参照)

リ、雄島

「須佐の入江の天神島は根から生えたか浮島か」と俗謡にあるやうに、天神島ともいひ、又岩の数が四十八もあるので、いろは島ともいつてゐる。佐藤博士の説によれば、もつと一つの島であつたのが、波濤のために侵蝕せられて、こんなに分れたのだといふこと。

此の邊には貝類が澤山産するので、拾つて土産にするのも一興であらう。

ツ、地の松島

沖の松島に對して地の松島といふ。松島の白浪は十二景の一。

ネ、赤瀬の洞門

ナ、烏帽子岩

此の邊岩層を縫うて南帯植物の達磨菊が密生し秋の花時は頗る美觀である。達磨菊は壹岐對馬筑前長門の海岸に自生する多年生草木で、莖は菊のやうに硬く、莖の上に多數の葉を簇生して冬季になつても凋落しない。其の形楕圓形で末濶く、厚質であるが柔か

く且つ軟かな毛茸を有してゐる。夏の末から秋に亘つて、蔓を抽くこと尺許、數枝を分岐し、各梢頭に一花冠を着生する。花形はよめなに似てゐるが多瓣で、周縁藤色を呈し、中心淡黄色を呈するのである。(植物名鑑による。)

ラ、潜洞

ム、観音巖

その形が観音の座像に似てゐるので此の名がある。高さ數十間の礫岩で頗る雄大である。

ウ、海苔石

海苔の産地であり、若布も澤山とれる。神山岬の海苔と若布は風味が特別で、京阪地方でも頗る賞讃せられる。若布は罐詰にしたのもあつてよい土産になる。此の邊は秋から初冬にかけてくろや釣りのよい漁場である。

このあたり一帯山裾に、廣大な岩石があり、大厦のやうな巨巖が、處々に重つて、屋上更に屋を築いたやうに、層々段をなしてゐる。又中には造化の神刀を以て美事にたち截つたやうな、長さ數十間高さ十數間底に碧潮をたゞへた、一直線の割れ目などもあつて、頗る偉觀である。

井、龍宮瀧

山麓の斷崖にかゝつて、海中に直瀉してゐるありさまは、碧浪に躍る白龍が、雲に向

つて騰るかと思はれる、珍らしいながめである。

ノ、鎧島

このあたり一帯はホルンフェルスの層で、その断面には數百の層をあらはし、うすいのは板の如く、厚いのは巨材の如く、或は黒く或は蒼く、或は灰色に或は雪白に、光彩錯綜して鮮麗華美の横縞を露はし、而も雄大豪宕鬼氣を帯びて頭上に迫り来る所、正にこれ天下第一品である。佐藤博士もかゝる大規模なホルンフェルスの層面が露出してゐる所は、日本には他にないといはれたさうだ。

鎧島は崖裾に分立してゐる三箇の巨巖で、その風姿と横層とが、名の如く鎧に似通つてゐる。

オ、千疊敷

ホルンフェルスの條層が、最も鮮明にあらはれた所で、そのやゝ斜に流れて鮮麗な縞目をあらはしてゐる所は、まるで造物主の大浴衣をのりはりでもしてゐるやうだ。巖は中間で斷たれて、斷崖を以て相接し底には碧潮をたゞよはしてゐる。之を境にして右の巖は高く短く、左の巖は低く長く、上面は二十度位の勾配を保つてゆるく流れ、數百間に亘つて平坦廣潤である。

附近に白石灘、白石、黒瀬、黒岩などがある。白石には髮毛海苔といふ面白い海苔が出る。見物を急ぐ人はこの邊から引き返すがよいが、ゆつくり見たい人は更に尾浦まで

廻るがよい。
ク、布の延び。

山麓の斷崖中に、數百間に亘る一大黒條が斜に流れて、消え残りの虹のあしのやうである。

ヤ、波里魔溪

著者を案内して呉れた尾浦の老人も、今迄一二度來たばかりといふ話で、殆んど世に知られてゐない。他郷のもので觀に來たのは恐らく、著者と田中氏とが嚆矢ではあるまいかと思ふが、素晴らしい絶景である。

溪の左右には凹凸のある球面の一部のやうな礫岩の斷崖が、茂樹鬱林の山麓に對立し、直徑十數間に亘る塊状の巨岩が錯落してゐる海岸に溪口を開いてゐる。溪の兩崖は相迫つてゐるから、幅は數間に足らぬ狭いもので、仰げば蒼天は天の川のやうに一線を劃するのみである。溪口から爪先上りに溯れば、約五十間位で第一淵に達する。僅か一二間許を登つて、更に五十間位溯れば第二淵に達する。

當面の巖隙から數條の溪水が、淙々と落下してゐる。下は物凄しい碧をたゞへた深潭である。昔早天に釣鐘を沈めて降雨を祈つたら、効驗があつたが釣鐘は上らなかつたといふいひ傳へがあるとか。こゝを越せば直に第三淵に達する。これはさまで深からず、水量の少いときは溢れ流れるまでもなく、底に沁みて第二淵に下るのである。

この第三淵に落ち下る瀧がある。高さ十間許水晶をさらしたやうだ。更に上つて瀧の背に出ると、滑かな大岩塊の上を、雌雄二條の清流が斜に併走してゐるのが見られる。

これが合流してさつきの瀧となるのだ。流れ下る向ふには、峡谷をへだて、溪口の怒濤が見える。蹠は瀑水を追うて迂り出はせぬかと、そゞろに心膽を寒からしめるのである。

マ、舵 穴

相對して二巨巖があり、その中間にすき間があつて、之に舵形の巨巖がはまり込んでゐる。まるで大船の艫を見るやうだ。

ケ、引明の瀧

尾浦の海岸から二町位の所にある。溪は四層をなし、上より礫岩、硬質砂岩、頁岩、蠻岩と、それぞれ岩質を異にしてゐる。第一第二第四瀑はいづれも直下し、第三瀑は斜走してゐる。

この瀧で面白いことは瀧壺がないことだ。点滴さへも石を穿つものを、瀧壺がないのは不思議であるが、これは地盤が堅牢なためである。この邊に江崎八景があるが、割愛して舟を返すことにしよう。

フ、長 磯

陸つゞきのよい遊び場である。貝類も澤山ある。

コ、海士ヶ地

蟹地の歸帆は十二景中に數へられてゐる。
工、煙 瀉

湖水のやうな入江である。煙瀉秋月は十二景中にかぞへられる。

此の海邊四五町奥に淨藏貴所がある。昔三好清行の第三子淨藏大徳が、各國修行の途次神山から灣内の風光を眺めて、その美に憧れ、遂に此の入江に庵を結んで、餘生を送つたといふこと。今は眼病の神として尊信せられ參詣者が多い。社名を鏡山神社といふ。

テ、青 浦

長磯から青浦一帯の海は遠淺であるから、海水浴旁々貝拾ひで、夏は頗る賑ふのである。

ア、露兵漂着の記念碑

法隆寺の側に記念碑がある。日本海々戰の折、露艦が沈没して、將校以下三十餘名のものが、ボートに乗つてこゝに漂着したので、一時法隆寺へ收容して、其の筋へ引き渡した。碑はその記念に建てたものである。

2、陸よりの探勝

須佐灣の探勝には舟を用ひるのを第一とするが、風波の荒い時分には、舟を利用することが困難であるから、陸上より要所々々を探勝するがよい。それには

イ、東廻り

先づ須佐灣の岸邊を迂回して、水海、赤島、久原波止場、龜島、鶴崎、平島、等を觀て、高山の峠を越へ、海苔石附近に出で、鏗島、千疊岩等をながめるがよい。(驛より約三十町)

又神山に登攀して、入江の優美と外海の壯大とを一眸に收めるならば、更に面白からう。

ロ、西廻り

鵜の瀬、聖巖、笠松山、青浦、煙瀉等を見て、山越に金瀾崎に出で、雄島、長磯、鼻面、屏風岩、沖の松島等を眺望する。

乙、陸上の勝地と古跡

須佐灣を探勝した序を以て、陸上の勝地古跡を探るがよい。

イ、益田氏舊邸と益田牛庵

驛から三町許の所にある。邸は須佐町沿革の中須佐村と須佐町の項に記載したから再説をばぶく。

益田家はもと石州益田の七ツ尾城に據つた豪族であつたが、第二十代元祥(牛庵)の代に始めて此の地に移つた。左にかゝげるのは元祥の畧傳である。

益田牛庵は石州の豪族益田藤兼の子、朝鮮の役にも名將として知られ、關ヶ原戰後家康はその才を惜み、本領安堵といふ條件で招いたが、牛庵は更に應ぜず、數万石の舊領

をすて、三千石に安んじて、毛利氏に仕へたのは、父以來の毛利氏の知遇に報いんため、その義の固いことは、戦國の世に稀に見る所である。

牛庵はその性武勇なるのみならず、頗る民政に長じ、勸農殖産に努めたこと、民のその餘澤を蒙つたことは非常なもので、福賀村に現存する牛庵堤は、その一斑を覗ふに足るものである。牛庵の最大事業は、毛利氏の財政整理であつて、毛利氏が領地の大部を失つて、僅に防長二州を保つに至つた際の、財政大困難の局に當つて、而も鋭意之が整理を敢行して、毛利氏の社稷安定の基礎を確立した。

寛永九年牛庵齡古稀に及んで、始めて二州財政總攬の大任を辭したが、其の自筆の引續書には、金銀什器に至るまで明細に記載し、「寛九ノ物也一粒モツカヒ不申相渡申候事」とある、どうにもかうにも手も足も出なかつたほどの、苦しい財政を美事に整理して、多大の貯蓄を残し、八月下旬の引續なのに、當年の歳入一文もつかはずとは、實に驚嘆にたえないではないか。牛庵の赤誠と才識とはこの一事を以てしても明かである。こんな次第で牛庵は、長州の大元老を以て待遇せられてゐたが、而も身は寒僻の要衝須佐を領して、北方の強として石州口を固めてゐた。

一休益田氏は毛利氏の譜代ではなかつたが、牛庵以來毛利氏と特別に深い關係を生じ、爾來家老の家柄となつたのである。

□、村社笠松社並に益田彈正

驛から三町餘、益田邸後の笠松山麓に在る。蒼樹鬱々として、閑靜清淨の神域である。慶應三年の建立で、華表に掲ぐる笠松社の額は、澤嘉宣の揮毫である。左に祭神益田右衛門介親施の畧傳を掲げる。

益田右衛門介は幕末に於ける長藩三家老の一人で、益田家第三十三代の英主、名は親施通稱は彈正、碌高は一万二千石。藩政をとるに當つては、大に綱紀を振張し、士氣の振作に努め、藩主毛利敬親の信任をうけた。文久二年藩世子元徳に従ひ京に上り、之を輔けて王事に勤めた。其の後一旦歸國の上、同三年更に藩主に代り、建言を齎して入京し、やがて夷虜親征の大和行幸の議が定つた。彈正は朝命により、藩兵を以て禁門を守衛し、在京有志と共に劃策する所があつたが、八月十八日會津藩の讒愬により、朝議が俄に變つて、行幸を中止せられ、長藩の禁衛を解いて、歸國を命ぜられた。右衛門介は百万回復を圖つたが、事遂に成らず、三條實美等七卿と共に長門に還つた。

翌元治元年藩兵大舉して京に迫り、藩主父子の冤を訴へんとしたので、右衛門介は主命により、これが鎮撫に努めたが遂にその目的を果さず、却つて彼等に擁せられて、將に京に入らうとして、山崎天王寺の邊に次した。七月十九日いよいよ狀を闕下に奏し、併せて京都守護職松平容保を除かうとし、兵を督して禁闕に向ひ、堺町門から入らうとすると、會津其の他の守衛の藩兵に遮られて、遂に銃火を交へるに至つた。然るに遂に敗れて山崎に退き、國司福原の二老と相前後し、兵を收めて國に歸り、罪を負うて采邑

須佐に屏居した。

間もなく藩主父子は重讒を蒙り、右衛門介等は徳山に幽囚せられた。其の後幕兵が四境に迫るに及んで、國司福原と共に一藩の責を引いて、十一月十二日岩國に於て自刃した。時に年三十二。首級は廣島に送り、征討軍總督の實檢に供した。明治二十四年四月朝廷その勤王報國の忠節を追賞して、特に正四位を贈られた。

彈正の逸事の中には、傳ふべきものが少くないが、こゝにはその二三を紹介するに止めておく。

△或る夏の晩に侍臣數人を従へて市中に微行し、某亭に登つて酒を命じて涼を納れてゐた。すると忽ち轟然たる筒音が起つて、銃丸が耳をかすめて飛んだ。侍臣等は色を失ひ、あわてゝ扶け去らうとすると、彈正は之を止めて

「一体非常の際に處して、思ひ切つたことをする以上は、素より衆怨に當る覺悟がなくてはならぬ。わしは既に身命をなげ出して、藩政に當つてゐるのだ。銃丸位が何だ。

まあゆつくり飲むがよい。」

といつて、からからと打ち笑ひ、杯をあげて満引、神色少しもかはらなかつたといふこと。

△堺町の變に事敗れて歸藩すると、俗論黨は既に藩廳により、彈正等の正義派を壓迫すること甚しく、道路續々不穩の報をつたへてゐた。従士は万一のことを心配して間

道から山口に入るやうにすゝめたが、彈正は更に聽かず

「わしは防長の士民に對して、何一つやましい事はない。その上君命を帯びて上京したのだ。復命を終らない間は、この体もわがものではない。藩主の使臣たるものは宜しく堂々たるべきで、間道をとつて君命を辱しむべきでない。」

といつたといふこと。万死不重君命重の語は彈正の屢々筆にしたものであるが、その語のごとく、至誠藩主を補けて王事に竭し、死生を超脱してゐたことは、これ等の逸事を以ても明らかである。

△采邑の政務を處斷する公衝に邑政堂といふのがあつた。或る日彈正が堂に至つて、昇降口の二つあるのを見附け、そのわけを質すと、當職のものが

「一方は上士ので、一方は下士でございます。」

といふ。彈正は

「さうか。處でその下士はわしが邸では、どこから上下してゐるか。」

「それは御式臺からでございます。」

「さうだらう。わしが邸でさへ下士も上士も、一樣に同じ式臺から出入してゐるではないか。それを役所で區別するといふ道理はない。こんなことはわしが臣下を待遇する眞意ではないのだ。」

といつてその一つを塞がせた。

△嘗て上京の途次舟中の無聊にまかせて、從臣某を召して

「近來攘夷論が上下にやかましくなつたが、汝はその成否についてどう思うてゐるか。」

とたづねた。某は

「それはきつと出来ませう。若し出来なかつたら、わが神州をどうしませうか。」

といふ。彈正は笑つて

「いやいやとても出来ぬ、出来るものではないのだ。」

といふ。某は驚いて膝をすゝめ、

「これはどれも異なることを仰せられます。獨守正氣如金石、遂舉防長、麤犬羊」とは君

かつて某に賜つたお言葉、犬羊は麤にしなければならぬのです。さきの正氣はどうな

さいましたか。」

とつめかける。彈正は

「さうだ、その覺悟がなくてはならぬ。その覺悟で進んでゆけば、五港を請うのに對し

て三港を開いてすまう。もしさうでなかつたら、神州は遂に洋夷に蹂躪せられるばか

りだ。攘夷は讓夷である、つまり夷をして數歩を譲らしめるのだ。今の時に方つて、

眞に鎮國の實をあげようなどと考へてゐるのは、全く時勢に通じないものである。」

といつてきかされたといふこと。前の例の非官僚的平民的であつたこと、後の例の大局を

達觀して時勢の趨向を察知してゐたことなどを考へると、彈正が近代的精神の先覺者と

して、時流をぬいてゐたことがよくわかるではないか。

ハ、育英館址並に小國融藏

育英館址は驛から六町許現育英小學校内にある。育英館は享保年間舊領主益田氏が、

その臣品川勿所を擧げて、藩士の子弟を教へしめたのに始まる。其の後波田嵩山山科太

室等が之に與つてゐた。嘉永五年領主益田親施が、累代の遺志を紹いで、學舎を増築し、

學規を改め、小國嵩陽を拔擢して學頭とし、文武の業を練らしめるに及んで、聲名一時

遠近に揚つたが、間もなく親施嵩陽相次いで歿し、佐江文學は漸次衰頽を來した。左に

學頭小國嵩陽の畧傳をかかげよう。

小國融藏號を嵩陽といふ。七才の時父を喪ひ、長ずるに及び、父の遺志をついで學に

志したが、家が貧しくて思を果すことが出来ないのを憂ひ、十九歳の時家を脱して江戸

に赴き、苦學數年、後昌平費に學び、安井息軒の門に遊んだ。夙に尊王の念を抱き、且

蝦夷開拓の説を唱へて、單身蝦夷に入り、樺太に航し、地形を察して、要塞設置の要地を

探窮し、屯田の策を講じた。

家を出でて殆んど十年、嘉永四年國に歸るに及んで、育英館の督學に擢んでられ、學

政を委任せられた。嘉永六年米艦浦賀に來泊の際には、益田右衛門介に従つて、成役に

従つた。其の後江戸小倉等に兵書を學び、九州を歴遊して、各地の名士と締交し、物情

を探つて、翌七年歸郷再び督學となり、兼ねて銃隊を訓練し、兵書を講じ、常に外交禦

侮の術を講じ、士氣を鼓舞し、大義を明にすることを以て自ら任じた。

融藏は吉田松陰、僧月性等と意氣相投合してゐた。就中松陰とは志を通じ、塾生を交換して研鑽を圖り、他日大に爲す所あらんとした。

文久二年藩主毛利敬親が、列藩に先立ち公武合併運動をなすに方り、主人右衛門介は密勅を司つて京師にゐたが、融藏は之をたすけて、諸藩の名士の間に周旋し、種々劃策する所があつた。

元治元年久坂義助等と藩主雪冤運動を圖り、事敗れて自殺をはかつたが、義助が後事を托し百方慰諭したので、遂に思ひ止り、主人右衛門介の後を逐うて國に歸つた。

同年八月右衛門介が徳山に幽せらるゝに及び、融藏は同志大谷樸助と策應して、主人を幽厄の中から抜かうとしたが、遂に果さず、俗黨の忌む所となり、蟄居を命ぜられ、悲憤の涙を吞んで遂に病歿した。

二、晩香堂址

前記育英館址と相接してゐる。

晩香堂はもと小國融藏の官舎であつたが、後には松下村塾の分塾のやうな姿になつた。須佐から村塾へ入塾した最初の人、大谷樸助であるが、樸助は松陰自筆の士規七則を貰つてゐる。これは松陰遺筆中重要なものであるが、松陰が之を贈つた心事は思ふに須佐に村塾の分塾をなすための鏡のつもりであつたらしい。

樸助の後を追うて、須佐からは、重臣益田邦衛以下新進の青年七人が入塾し、村塾からは、須佐開港論の材料を松陰に提供した、富永有隣を始めとして山田顯義、伊藤博文、品川彌二郎、久坂玄瑞などの錚々たる連中が、十數人もやつて来て、晩香堂に入り込んで、自炊をしながら教授をしてゐた。大谷樸助も勿論幹旋につとめてゐたのである。是等の人々は年こそ若い、その青年をひき立て、ゆく態度は、實に緊張したものであつたさうである。何しろ村塾としては唯一の分塾で、精神的新領土の開拓なのであるから、その意氣込は素晴しく、數ヶ月間の臨時事業ではあつたが、須佐の豪圍氣を一新し、後年回天軍の義舉なども起つたのである。

益田彈正歿後の須佐回天軍の顛末は、津田常名翁の筆になる回天實記にのべてある。(同書は京都の尊攘堂に納めてある)常名翁は現町長津田五百名氏の實父で、今年(昭和三年)八十二歳、少年の時から彈正に近侍し、幕末の多くの事實を目撃し、下關海峽の攘夷戦、堺町の變、蛤御門の戦、長州四境の戦争、鳥羽伏見の戦等の實歴者で、今日他に類例の少い回天史實の目撃者である。

ホ、大谷樸助の宅址

驛から六町位、心光寺の裏の小川に沿うてゐる。

樸助名は實徳、益田右衛門介の家人である。蛤門の變には、彼は久坂玄瑞に従つて京都にゐた。久坂の命を受け藤村某と共に、陳情書を携へて淀城に入つた。衛兵が之を捕

へようとする、どなりつけて

「我等も禁を犯すの非を知らないのではない。臣子の情として自ら止むを得ないのだ。この書は之を貴藩の主君に御渡しするのだ。」

といつて衆を排して入る。そこで重臣が出て應接し、二人を客舎に延いて厚遇し、辭を設けて書を還した。二人は更に屈せず

「貴藩は老中職ではござらぬか。上言を擁塞してその職を盡したと申されますか。これがために他日不測の變を起したら、それこそ貴藩主の責任でござるぞ。」

ときめつけたので、重臣も辭がつまつて遂に陳情書をうけたといふこと。鹽谷宕陰が樸助の文を評して、鋒銚が露れすぎるといつたが、機鋒の鋭いことは概ねこの類である。

其の後右衛門介が死を命ぜられて自刃するに及び、樸助は悲憤して河上範三と相謀り、諸隊と志を通じ、帝側を一清して、主君の恨を晴らさうとしたが、果さず、範三と共に三十にも足らぬ（時に二十八）若さで、悲壯の最期をとげた。それは俗論黨が主命を矯めて、切腹を賜うたからで、彼は寺の本堂の眞中に端座して、美事な切腹をとげた。其の時縁側の障子の隙からは、反對黨の人々の覗き見をする眼が寒夜の星のやうであつたといふこと。

へ、郷社松崎八幡宮

驛から八町本町上の丁の頭に在る。

孝徳天皇の大化六年、豊前國宇佐八幡宮を當地松ヶ崎に勧請し、寶永十六年現在の所に移した。本町の産土神である。社前の兩側に並び立つ石燈籠は、舊領主の江戸參勤から歸國の度毎に献納したものである。（本社はもとは現に八幡ヶ濱といつてゐる海岸に在つた。）

ト、官祭三隆山招魂社

驛から三町海藏庵と稱する地に在る。

明治二年の創立、楠木正成の靈を安置し、戊辰の志士三十七名を祀る。その中には奇兵隊の人々が多い。毎年四月十五日に祭禮を行ふ。

チ、唐津の梅林

驛から十五町

深々たる溪流に沿うて行くと、犬鳴山の蒼翠眉に迫るあたりに、數十株の老梅が、清淺の流に臨んで臥龍の姿を列ね、横斜の枝を交へてゐるのが、眼に入るであらう。早春梢頭に香雲を宿す頃、杖をひいて遊んで見るがよい。林を隔ててひびいて來る、鶏犬の聲までも香ばしく、坐に仙境に入る思がするであらう。

リ、唐津瀧

更に溯ること二町許りにして、一道の瀧がある。こんもりと茂つた樹々の緑の、埋め残した二間の幅を、わがもの顔に涼々と落ち来る一條の瀑布、うねうねと上下三十間ばかりの白蛇の姿をあらはしてゐる趣、夏はこの上ないすゞみ場だ。單に暑さを洗ふばかりでなく、世の煩ひも心の塵も、洗ひ流してさつぱりするにちがひない。とにかく樂にゆかれる瀧として誇るべきである。

又、須佐燒窯元

梅林と瀧との中間にある。豊公征韓の役に舊領主益田氏の軍に従つて歸化した韓人が、後に土谷六郎左衛門と改稱し、陶器製造を創始したので、このあたりの地名を唐津といふといふ傳説があるが、眞偽はともかくとして、この地の産須佐燒は、須佐土産の一つたるはいふまでもない。

ル、鏡山神社

驛から十町（海邊勝地エ哩湯の項参照）

ヲ、篤行者下瀨マツの宅

下瀨マツ女は十六の時に養父を喪ひ、その涙もまだかわかぬ中に又も養母と別れるといふ憂き目にあつた。ほころびそめた花の蕾に浮き世の嵐はあまりにも慘酷だつた。

十九歳で迎へた夫には、屢々虐待をうけながらも、遂に之を感化して、家業にはげませ信心を持たせて、遂には人に推されて寺總代となるまでに仕むけたが、不幸にして夫

は病の床に臥し、夜を日についだマツ女の看護もその甲斐なく、遂にはかなくなつたのである。マツ女は爾來哀悼措く能はず、懇に追吊の誠を盡すありさまははたの見る目もあればであつた。

マツ女に一人の伯母がある。これも極めて不仕合せで、十六の年に兩足の自由を失ひ、床についてゐること六十五年今年八十になるわけだが、マツ女は伯母が四十餘の時から母のやうにかしづいて、枕頭には四季折々の花をかざつて無聊をなくさめ、祭禮説教などのある時には、ひと目もいとはず脊に負うて、賑ひを見せたり、み佛ををがませたりしてゐたが、近年ひどく老衰し、その上目まで見えなくなつたので、縁ぎに出ても晝はかへつて食事を與へねばならぬ始末。それでも少しもいたふ所なく貧しい財布の底をたいたいて、木造の小車を作つて伯母をのせ、宮寺へ伴れて參るを無上の樂しみとしてゐる。わが身に積る老もわすれて、一人手に一家の暮しをたてゝゐるが、一方では近所の少年をあつめて、毎土曜日に軍歌を合唱して市内をねりあるき佛恩報謝の宣傳をなし、お寺へつれて行つて説教をきかせるといふ話。

特に皇室のことには心をとどめ、戊申詔書煥發の際には之を謄寫して假名を付け、壁間に掲げて日々三誦して實行に勵んでゐた。又明治天皇や大正天皇の御不例の際は毎夜専心御平癒を祈り奉り、崩御の後は御姿を掲げ御供物を奉り、僧にたのんで御法要までもしてもらつてゐるといふこと。これまで表彰をうけたことも度々あるさうであるが、

誠に珍しい女である。
ワ、大瀧寺

驛から七町

禪宗、天正十九年開基、舊領主益田氏の菩提寺、本寺は大津郡太寧寺。

カ、淨蓮寺

驛から九町

眞宗、應安五年開基、本寺は萩町端坊

ヨ、心光寺

驛から六町

淨土宗、慶長十七年開基、本寺は京都知恩院。

タ、法隆寺

驛から三町

眞宗、天正五年開基、本寺は淨蓮寺

レ、紹孝寺

驛から六町

禪宗、文龜三年開基、本寺は大津郡太寧寺。

リ、光讚寺

驛から三十町

眞宗、開基年代未詳、本寺は萩端坊

ツ、犬伏城址

驛から十五町

御手洗左京之允の居城、後益田氏の抱城となる。

ネ、懸ヶ城址

驛から 町

寺戸大學の居城、後増田家の抱城となる。

十、笠松山の城址

驛から三町

吉見家の出城。

丙、須佐十二景

名勝須佐灣の特色は、前章既に詳述した所であるが、これは現代的觀方によるもので、昔は須佐の勝景を精選して、十二景にまとめてゐた。前章各所にその一々をあげてはおいたが、更にこゝに一括して紹介しておく。

十二景選定の年代はつきりしないが、恐らく寛政年間のことであらうといふ。十二景に寄題した人の中で、よく知られてゐるのは、前権大納言日野資枝（左記の和歌）と、

龜井南冥（左記の漢詩）である。資枝は、益田牛庵から十代目で、須佐の文學興隆に力めた就祥（文化元年六十二歳で歿）の國學の師で、就祥に招かれて、當地にも來たことがあるさうである。南冥の作があるのは、長州は山縣周南以來徂徠派の古學が勢力があり、従つて龜井塾との關係も密接であつた爲であらう。

鶴崎晴嵐

海越しの山風渡る鶴崎の晴るる見る目は千代もかはらじ
誰知十洲外。長門有鶴洲。羣嵐晴可畫。清暎落中流。

蟹地歸帆

眞帆片帆ひきて夕は蟹が地の磯邊にかへる千舟百舟
點々蒲帆影。釣鱸何處歸。可憐鳥々背。與帶夕陽飛

中島泊舟

とまり舟枕とる間もなか島の波の響を聞き明すらし
落帆何處舶。九國定三越。不識瑞林寺。疎鐘夜半月。

玉島夕照

夕つく日岩こす波に輝きてむべ玉島の名こそ隠れね
帝壁岷崙璞。投之東海裔。波間屢露頂。夕日爛相媚。

煙瀉秋月

みつしほに浮べる月を秋は見んあまの煙瀉いとまなくとも
煙浦千秋月。千秋月下人。不看秋月好。采煙給丁媿。

雄島千鳥

うき妻におき別れてやさよ千鳥名残をしまの波になくらむ
雌禽從厥雄。兩々皆相呼。驚起看雄島。有求雌鳥無。

瑞林晚鐘

入相の聲きく峯を木の間よりみつのはやしの寺そはるけし
欲識妙高頂。瑞華芬滿林。雲歸人籟罷。隱々莫鐘音。

大越落雁

仰ぎ見る高嶺を連れて大越の濱への秋に落つるかりがね
登樓看大越。簾幕徹清秋。潮聲歸極浦。雁陣下中洲。

松島白浪

松島の影見る海にいくかへり千代の數とる浪の白珠。
何年東奧勝。飛落穴門前。白波瀾危岸。青松媚遠天。

平島夜雨

ふりいでてあまもぬる夜の平島にとまもる雨の音ぞさびしき
秋雨瀟湘雨。遷人奈恨何。唐崎與平島。夜雨不堪多。

笠松暮雪

積りても掃はぬ雪の光あれば夕ぞ遅き笠松の山
雪壓松如笠。思詩祇自若。蘇公安在哉。髣髴吳天雪。

龜島遊魚

いろくづも万代かけて龜島の風靜かなる波に住むらし
鯨鯢潜又躍。玄澗宅胚渾。似欲窮天關。南冥化鯢。

丁、須佐年中行事

- 四月十五日 松崎八幡宮春祭、官祭三蔭山招魂祭
- 四月二十日 鏡山神社春祭
- 五月一日 神山黃帝祭
- 五月五日 天神春祭
- 七月十五日 祇園祭
- 七月十六日 同
- 七月十七日 辨天祭
- 七月十八日 同
- 九月三十日 松崎八幡宮秋祭
- 十月十日 鏡山神社秋祭

十月十二日

笠松神社例祭

戊、須佐土産

須佐名物としては左記のものがある。

- 一、須佐若布 年産額、
- 二、神山海苔 同 一千圓
- 三、鰯 同 二万四千圓
- 四、鮑 同 五千四百圓
- 五、鯛 同 九千四百圓

尤も産額の多いものには、なほ鱈、鯖、鰯、等があるが、特に優良なものとしては、前記のものなどであらう。なほ

六、須佐焼

があるが、その産額は未詳である。以上の数字は鐵道開通前の販路狭少の時代のものであるから、今後は格段の増額を見ることがであらう。

(三) 天然記念物としての須佐灣

須佐の地質をとくにあたつて、地質や岩石についての極めて概畧の序説を加へておく。

一、地殻發達の順序

1、地殻の成生

地球を一つの卵とすると、その殻の部分にあたる部分を地殻といふ。この地殻は初めから今日のやうな状態であつたのではない。いやそれは地殻だけでなく地球全体が、今日のものとは趣を異にしてゐて、成生の最初に於ては地球は恰も今日の太陽のやうに赫灼たる熱液から成つてゐたものであるが、漸次その熱を放散して、外側が次第に固まり薄い膜を生じて來た。これが最初の地殻で、現在の地殻の最下部に現はれる花崗岩及びその變成物である片麻岩の類が是である。

2、海陸の成生

地球がなほ冷却をつゞけてゆくと、内部につゞまれた熱液が更に冷却して、その容積を減じてくる。さうなると焼けふくれた餅が冷えたり、生の葡萄が乾からびたりする時に、外面に皺が出来てくるやうに、地殻も或は褶曲し或は斷裂して凹凸を生じてくる。この凹處には水を湛へて海洋となり、凸所は水上に頭をもたげて陸地となり。こゝに海陸の別が生じてくるのである。

3、水成岩

さて海陸が別れてくると、陸上では風や雨や流水のために、岩石が次第に削磨せられ

侵蝕せられてくる。そしてその削磨侵蝕せられた産物は流水に送られて海洋に流れ込む。海洋ではこれがだんだん静かな水底に沈んで積り積つてゆく中に、上部のすばらしい壓力の影響などによつて再び固結してくる。これが水成岩である。この水成岩は地殻の褶曲によつて陸地となり、吾々の目にもつくやうになる。水成岩は幾回にも亘つて出来るもので、古いのもあれば新しいのものもある。

4、火成岩

水成岩に對して火成岩といふのがあつた。これは地球内部にあつた熱液（これを岩漿といふ）が温度の低い地殻中にふき出して、熱を失つて冷結したものである。

5、變成岩

又別に變成岩といふのがあつた。これは水成岩又は火成岩が、一種の地質的動力と高熱との爲に、その性質を變じたもので、その成分たる礦物の種類と結晶質であることは火成岩に類し、その層理を呈してゐることは水成岩に似てゐる。

6、化石

地殻の發達を研究する上に最も大切なものは化石である。化石といふのは、地上に生育してゐた生物の遺骸等が、地層の中に保存せられてゐるものである。一体生物は地殼と同じく、その初から現存の種族が生育してゐたわけではない。その初には劣等の種族のみが繁殖してゐたのであるが、地殻の沿革と外界の變遷とに促されて、次第に

發達して今日のやうなものになつたのである。だがら過去の生物界の状態は、地殼の變遷と共に變遷して、各層特有の化石を藏してゐる。中には或る時代にのみ繁殖して、次の時代には絶滅した生物の化石などもある。これは地層の年代を査定するに最も必要なものである。

二、地質系統の大別

上述の理由により、學者は化石の種類と岩石の配置とを研究して、地殼發達の時代を大別して四代とし、更に分つて數紀としてゐる。之を地層について言ふときは、代を界紀を層と名づける。

1、太古代

最古の地層で正確な化石を發見しない。そこで岩石の種類によつて左の二紀に分つ。

イ、片麻岩紀

ロ、結晶片岩紀

2、古生代

岩石は水成岩よりなり生物の繁殖した證跡が明かで、數多の化石を藏してゐる。だが多くは劣等の種族で、植物は隱花植物を主とし、動物は兩棲類以上の高等動物はゐない。本代の末期には種々の火山岩を噴出してゐる。本代には左の數紀がある。

ハ、カンブリア紀

ニ、シルール紀

ホ、デボン紀

ヘ、石炭紀

ト、二疊紀

3、中生代

中世代は次の三紀に分れてゐる。

チ、三疊紀

リ、ユラ紀

ヌ、白堊紀

前代の終は陸地の多かつた時代だったので、本界の下部は主に淺海成堆積物より成り、上部の白堊系のみが深海成である。生物界は前代と面目を一新し、植物は裸子顯花植物を生じ、終に至つて少許の被子顯花植物を見る。動物界に至つては更に著しい變化があり、蛇龍だとか魚龍だとか翼手龍だとかの奇形の大怪物は、ユラ紀に全盛を極め、當地に化石の發見せられる海膽などは白堊紀に全盛を極めたものである。

4、新生代

ル、第三紀

ヲ、第四紀

新生代は右の二紀に分れてゐる。第三紀は地殻が掉尾の大變動をなした時期で、アルプスやヒマラヤのやうな世界の大山脈は、この時に成生したものである。生物界の面目も更に一新し、植物は被子顕花植物となり、動物は哺乳動物がその數を増し、中にはマストドン、大懶獸のやうな巨大な動物もゐた。第四紀には更にマンモス其の他の怪獸奇鳥が出たが、之と同時に人類の祖先があらはれて、之等の兇暴な野獸と争つてゐたといふことは、石鏃や石斧がこれ等の骨と共に地中に埋存してゐるので、推察せられる所である。

三、須佐灣附近の地質

須佐灣附近の地質について、佐藤博士の調査に基いてその大要をのべて見よう。(、を附した所は博士の調査によつた所である。須佐灣附近の地質は第三紀層、沖積層及び斑糲岩、石英斑岩、玢岩等からなつてゐる。

1、第三紀層

第三紀層は前記新生代の前半期に成生した地質である。以前古生代を第一紀、中生代を第二紀と呼んでゐたので、その次にある故を以て第三紀と呼ぶのである。我が國でも介化石にとみ又植物化石も少くない。俗に天狗の爪といふのは此の層中にある魚齒の化石である。第三紀の岩石には砂岩、頁岩、礫岩、凝灰岩等がある。さて須佐に於ける第三紀層は神山の四周を形成し、最下部に礫岩があり、最上部に頁

岩があり、中部に砂岩がある。

イ、礫岩

豆大以上の削磨せられた石片を礫といひ、礫が粘土質、砂質、石灰質等の膠結物によつて固められて、岩石になつたものを礫岩といふ。礫岩といつたり子持岩といつたりもする。古生代、新生代の各地質時代を通じて地層中に之を産する。

ロ、砂岩

豆大以下の削磨せられた石片を砂といひ、その凝固したものを砂岩といふ。砂岩は普通層狀帶狀をなし、其の成層が分明である。常に粘板岩、泥灰岩、石灰岩、頁岩、石灰層等と互層し、太古紀以下各時代の主要な地層を構成してゐる。

ハ、頁岩

岩石の破壊せられ且つ化學的變化を被つた微細分を粘土といひ、粘土の凝固したものを粘板岩といひ、その凝固程度の不完全なものを泥板岩といふ。泥板岩は頁岩ともいふ。(前項に書いた泥灰岩は多量の石灰分を有する泥板岩である)この頁岩は層理が分明で、石灰岩、砂岩、泥灰岩並に石灰層と互層し、古生、中生、第三紀等の諸層に著しく發達してゐる。

ニ、ホルンフェルス

神山の斑糲岩に接してゐる砂岩及び頁岩は接觸變質をうけて、變質してホルンフェル

スとなつてゐる。所謂スレートの大絶壁といふのは、實はホルンフェルスの大絶壁である。

一体接觸變質といふのは、火成岩が水成岩を貫いて迸出したために、水成岩の之に接觸する部分が、其の高熱のために變質するに至つたものをいひ、大凡次の三種に分れる。

A、岩石が炭化する場合

褐炭が黒炭になり、黒炭が無煙炭となつて、含炭の量を増加してくるやうなもの。

B、岩石が硬化して破璃質又は結晶質を帯びる場合、

砂岩が破璃狀を呈し、泥板岩、粘板岩等が堅い陶器狀をなし、石灰岩が粒狀結晶質を帯びて大理石となつたやうなもの、

C、水と熱の作用によつて變質を生ずる場合

地中から噴出する熔岩は種々の礦物質を含有する多量の水を有してゐるので、他の岩石中に迸出するときは、此等の水はその中に滲入し、高温の作用と相俟つて、岩石に化學的分解を起してくるので、それが再び凝結し結晶するときは、其の組織成分は著しく以前のものと異つてくるのである。

さてホルンフェルスは粘板岩が接觸作用のために結晶質となつたものである。

ホ、化石

化石としては牡蠣、海膽及び木葉などがあつて、主として砂岩中に埋藏せられてゐる。

蓋し第三紀中新統のものゝやうである。當地の第三紀層中には、褐炭層がある。

2、斑縞岩

斑縞岩は火成岩の一種で一名飛白岩とも稱する。白色で光澤の著しくない斜長石の中に、黒褐色の異剥石が飛白のやうに混在してゐるので、肉眼で最も分りやすい岩石である。尤も斜長石は異剥石の分解によつて薄い綠色を呈することがある。異剥石は新鮮なときには金屬に近い光澤を呈してゐる。斑縞岩は分布が大でなく、千葉縣、岐阜縣、淡路島、山口縣等が著名の産地である。

須佐に於ける斑縞岩は神山を構成するものを主とし、部分によつて岩漿分體を生じ、石英斑縞岩、紫蘇輝石、斑縞岩、橄欖斑縞岩、石英モンゾニール岩と稱すべき岩種となつてゐる。蓋し餅盤として第三紀層中に迸入したものであらう。尙神山の頂上附近には磁性の特に顯著な部分がある。

3、玢岩

斑狀の火成岩で、綠色又は灰色味ある石基を有し、其の間に斜長石及び角閃石の斑晶が散在してゐるが、細粒質のものは其等の礦物を肉眼では認め得ない。

玢岩は岩脈又は岩床を作り、本邦に於ては中生代及び中生代末葉若くは第三紀の始と想はれる御坂層中に盛に流出し、その層間に層磐を造つてゐる。其の産出の多い地方は福岡縣、宮城縣、岩手縣、宮崎縣、山口縣等である。

須佐に於ける玢岩は岩脈或は岩床をなして第三紀層を貫いてゐる。蓋し神山の斑糞岩の一異相をなすものであらう。

4、石英斑岩

石英斑岩は火成岩である。花崗岩とその成分を等しくするけれど、著しく其の組織を異にし緻密な石基中に石英長石並に角閃石雲母の斑晶を散點してゐる。本邦に於てその噴出の多い地方は、山陽道の各地、飛騨、美濃、紀伊等である。須佐に於ても亦之を見ることが出来る。玢岩と同じく岩脈及び岩床をなしてゐる。

四、地殻の構造

地殻は現出の状態を異にしてゐる層状岩（水成岩等）と塊状岩（火成岩）とから成立つてゐるので、一部分には層状岩が重つて層をなし、他の部分には或は之を貫き或は之を被うてゐる塊状岩があつて、頗る錯雑な構造をなしてゐる。

1 地層の褶曲及び斷層

地球が冷却して收縮するに伴ひ、これを包んでゐる地殻は互に横に壓しあつて、地層に波のやうな起伏を起さしめたり、龜裂を生じて左右の地層の位置を變ぜしめたりする。前の場合を地層の褶曲といひ、後の場合を斷層といふ。

2、塊状岩の地殻構造状態

塊状岩は噴出の状態によりて、岩株、餅盤、岩脈、岩床、岩鐘、岩臺、熔岩流等に區

別せられる。

岩株とは不規則な大塊をなして、地盤の中に割り込んだものをいひ、その周邊から細い枝を射出して四周の岩を貫くものを岩脈といふ。餅盤とは地層の一部を持ち上げてレソズのやうに固つたものをいひ、岩株と同じく屢々岩脈を射出してゐる。岩床といふのは地層の層面に沿うて薄くひろがつたもので、つまり餅盤の平たいものである。岩鐘は岩脈の先端が地上に鐘状をなしてゐるものをいひ、それが平たくなつてひろがつておれば岩臺といふ。又熔岩流とは地表を流れた熔岩のかたまつたものである。

火成岩が水成岩中に噴出して、その周圍に鑛床を發生することがある。その鑛床の成生に種々の場合があるが、岩漿が冷却凝固する際其の中に含有せられた有用鑛物が岩漿中から分体して、一ヶ所に集合するときは岩漿分体といふ。

五、地質學上特に注意すべき點

須佐灣内外の地質に對し、佐藤博士の地質學上特に注意すべき點として指示せられた

- 所は、
- 一、神山の斑糞岩類は第三紀層中に餅盤をなしてゐること。
- 二、神山の斑糞岩類は岩漿分体が明かであること。
- 三、神山の斑糞岩類は接觸變質が明かであること。
- 四、須佐灣の絶壁には岩脈が縦横に貫通してゐること。

五、須佐灣の絶壁には断層が明かに現はれてゐること。
六、須佐灣が幽邃な渚水の如き風光を呈してゐるのは地盤が沈降した結果であること
等である。

六〇

(四) 附近名勝

一、萩町

西南方十里許、自動車の便がある。

萩町は毛利輝元以來毛利家累代の舊城下で、長門峽（大正十二年三月七日内務省より名勝地として指定せられた）で名高い阿武川の下流に位し、東西約六里南北一里、三面山を繞らし北は日本海に接してゐる。人口參万余昨年末開港場となつたが、今の所商港といふよりもむしろ史跡名勝の遊覽地ともいふべき所で、市の内外に杖をひくべき所が少くない。左に二三を紹介しよう。

○志津岐山神社及び志都岐公園

神社の祭神は毛利元就、隆元、輝元、敬親

○舊城址

○花江御殿の茶室

毛利敬親が茶事に托して志士を會し、國事を密議した所

○東園址

○住吉神社

七月三十日から八月三日までの祭禮は萩町第一の賑ひである。

○南園館

舊藩主の別邸で萩高等女學校内に在る。

○野山獄址

吉田松陰その他の志士の幽囚せられた所

○明倫館址

水戸の弘道館、岡山閑谷齋と共に日本三館の稱のあつたもの

○松陰神社

その境内にある松下村塾並に吉田松陰幽囚家屋は、大正十一年十月十二日内務省から史蹟として指定せられてゐる。

○吉田松陰誕生地

○東光寺

毛利家の菩提所

○反射爐

大正十三年十二月九日内務省から史蹟として指定せられた。

○大照院

毛利家の菩提寺

○笠山

橋自生北限地である。大正十五年二月二十四日内務省から、天然記念物として指定せられた。

○明神池

天然鹹水池で多数の海魚が棲息してゐる。大正十三年十二月九日天然記念物として内務省から指定せられた。

二、益田町

石見益田驛より半里、島根縣石見國美濃郡に在る。その七尾山に本町の舊領主益田氏の古城址がある。益田氏は元來石州の豪族で毛利氏以前石州の西方に於ける一勢力であった。書聖雪舟を保護した名家で、その筆になる壽像及び大屏風一雙は稀世の寶物とすべきもので、現に益田家に傳へられてゐる。

この地に万福寺(時宗) 醫光寺(臨濟宗) 及び附近(吉田村)の大喜庵はみな雪舟に關して名高い寺院である。中に就き大喜庵は雪舟の終焉地でまた其の墳墓もある

三、柿本神社

石見益田驛より半里

石見國美濃郡高津村に在る。もと人丸寺といひ人磨の廟であつたのを近年改めて神社としたもので、寺は眞福寺といつて今は別にしてある。昭和九年津和野侯建立の石碑がある。文は釋顯常の撰。廟地はもと海上に横出してゐたが、万壽三年海嘯のために崩れたので、松崎の地に更め作つたのを、再び災に罹らんことを慮り、更に南方一里の地に移したのだ。地を高角山といふ。

(五) 須佐の印象

御笑草に著者の駄作をあつめておく。

須佐 灣

須佐はよいとこ 入江の名所

うねりうねつた 岬のうでに

ねむる蒼潮 流れる白帆

帆かけ島かけ 鷗に雲よ

外は荒海 うつ大なみを

岩の高かべ どつかとうける

俚
諺

雪とわくなみ 赤鯛あはび
海苔に若布も 自慢の味よ
須佐はよいとこ 入江の名所

◇須佐

須佐はよいとこすさのみことみ舟どまりのみ津のあと

◇須佐灣

やまたをろちがねたよな入江入江わかれて又入江
入江入江の大島小島島をぬひゆくまほかたほ

◇千疊巖

海をたらひに洗うたゆかた岩にひろげて五千年

◇金瀾

月にぬれ立つ大岩小岩海に金瀾黄金のなみ
赤い夕焼海までやけて岩も並んで燃えてゐる

◇屏風岩

怒る大なみどつかと打てど岩は千尺知らぬかほ
仰ぎや白雲南にとんで岩の高壁崩れさう

營 業 品 目

吳服反物 書籍文具 教育掛圖 理化器械 博物標本 度量衡器

須佐町

岩本彌左衛門商店

振替東京四六一
口座下關一〇九四

太平生命保險株式會社代理店
日本海上保險株式會社代理店

學校團體には旅館及名勝案内等特に御便利
御計り可申候

業 開 築 新

親切丁寧

長石旅館

并ニ貸切
乗合 自動車部

開業御披露の爲め特別大勉強致します

須佐驛前

館主 吉岡満男

須佐名産 味附若芽製

磯のかほり

磯の華

須佐町港橋通

製造發賣元 中野久吉商店

振替口座一〇四〇
發信略號(ナ)

釣道具類式

釣竿 製造卸商
國旗竿

須佐町

高田兼藏商店

振替口座(阪七六六〇番)
電話(夕力)及ハ(夕)

吳服反物

須佐町稻荷座通

萬小間物

化粧品雜貨

并ニ煙草

山根德次郎商店

須佐中津町

吳服太物商

石永吳服店

清酒 都川卸小賣商

須佐浦本町

内田榮助

山口縣須佐町

吳服太物商

今見戶岩吉商店

和洋菓子製造販賣業

須佐浦本町

平野久五郎

製パン業

須佐町

中川地球堂

并ニ和洋菓子販賣

乾物荒物

須佐町

堀豐治商店

并ニ陶器雜貨商

振替口座下關一一八三〇

吳服太物

須佐町

祝儀小袖



吉田吳服店

嫁入道具

和洋砂糖

須佐町

洋粉雜貨

早川商店

煙草油類

(電略ハヤ)

御旅館

懇切丁寧

須佐中津町

御料理

誠實勉強

柏谷旅館

土木建築請負業

并ニ木炭材木販賣

須佐町驛通

勝山國太郎

新德旅館

鐵道省御指定
港灣輕便御案内

細字ハ午前 汽車發着時間表 太字ハ午後

下	石見益田發	4.00	6.30	9.25	12.03	2.15	4.43	7.34
	戶田小濱發	4.24	6.48	9.50	12.22	2.40	5.02	7.49
	飯浦發	4.36	6.56	10.00	12.30	2.50	5.10	7.57
	江崎發	4.51	7.07	10.15	12.41	3.05	5.21	8.08
	須佐着	5.05	7.18	10.29	12.53	3.19	5.33	8.20
上	須佐發	5.22	7.30	10.50	1.00	3.35	5.43	8.30
	江崎發	5.35	7.46	11.03	1.12	3.47	6.00	8.42
	飯浦發	5.49	8.01	11.17	1.25	4.00	6.06	8.55
	戶田小濱發	5.57	8.10	11.25	1.32	4.07	6.27	9.02
	石見益田着	6.15	8.32	11.43	1.50	4.25	6.48	9.20
石見益田發	小郡行	9.14	11.54	2.01	4.41	7.27	10.28	
石見益田發	出雲方面行	8.38	1.13	3.48	6.52	9.29		
小郡發	東京方面行	12.51	3.10	5.15	8.01	11.59		

元賣發造釀

山口縣江崎驛前
田中瀧輔本店
同江崎出張所

鐵道開通記念
景品付大賣出中

位本質品對絕
種各口濃口淡
集募大店約特

び 九 大
ん 升 樽
詰 詰 詰

舎
リアマヤ
醬油

萬金物商



吉田三槌商店

振替大阪六一六五二

須佐本町

神理教中補教

國弘忠次郎

御料理

其外いろいろ

須佐中津町

みやこ屋

純良藥品
有効製劑

須佐町

井本藥局

振替口座大阪一六〇四三番

清酒釀造元

須佐中津町

野上酒場

和洋御料理

須佐町

稻荷亭

振替口座大阪二八九二六

文房具

化粧品商

并ニ荒物

パイロット高級万年筆特約販賣

須佐中津通

大草文具店

萬小間物

并ニ履物類

須佐町本町通

大和商店

旅館

須佐中津町

并ニ

長崎屋本店

御料理

館主 大谷清輔

和洋酒類販賣

并ニ

御待合所

須佐灣名勝御遊覽の際は懇切丁寧且つ廉價にて御案内の求に應ず

須佐驛前

長崎屋支店

須佐驛前

長門屋 山地商店

酒類醬油釀造業

須佐中津町

清水酒場

萬小間物

須佐中津町

藤山商店

煙草玩具

萬小間物商

并
= 化粧品雜貨

須佐中津町

林常八商店

御旅館

并
= 御料理

須佐町稻荷座通

三角亭



須佐合同運送合資會社

ラーヂ號

パーソン號

ミンブク號

スプリング號

代理店

須佐町稻荷座通リ

長谷川自轉車店

電略〔ハセ〕又〔ハ〕

株式會社

萩銀行須佐支店

須佐漁業組合共同販賣所

須佐町

松原醫院

木炭材木竹材 山口縣阿武郡須佐町

肥料砂糖雜貨 幸月好松商店

八百屋物其他

時計

販賣
修繕

須佐町中津町

野原時計店

和洋御料理

須佐町稻荷座通

宴會引受所

一ツ家

并仕出し

國際通運取引店

鐵道省指定

須佐合同運送株式會社

和洋綿糸
各種毛糸
人造肥料
雜貨其他



下石永商店

共同印刷株式會社

昭和三年三月二十日印刷
昭和三年三月廿五日發行

著者 山口縣吉敷郡宮野村 白上貞利

印刷者 山口縣吉敷郡山口町道場門前九香地 小澤兵造

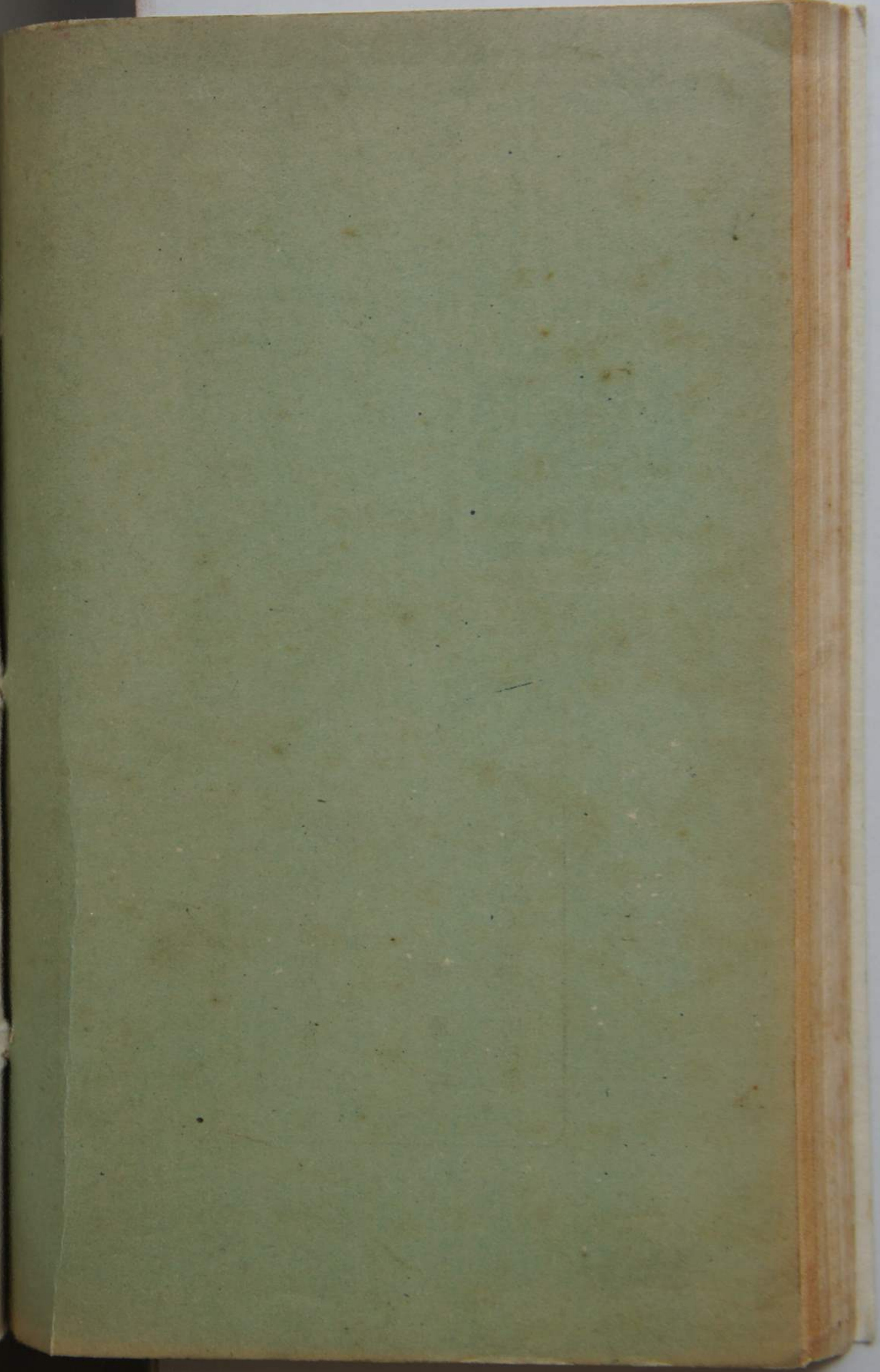
印刷所 同所 山口響海館

發行所 山口縣阿武郡須佐町役場

64p
18cm



TRC102086



36

萩市立図書館



111327276